

# 大田市 新観光計画

～滞在型観光をめざして～

平成 21 年 6 月

大 田 市

～なつかしの国 石見～

# 目 次

1	計画策定にあたって	2
2	大田市観光の現状	7
3	石見銀山エリアの現状	9
4	石見銀山観光の問題点及び課題	11
5	石見銀山観光の具体的対策	15
6	三瓶山エリアの現状	24
7	三瓶山観光再生を図る上での問題点	29
8	三瓶山観光再生の具体的対策	34
9	豊富な地域資源の有効活用	63
10	おもてなしの観点からの観光振興	66
11	資料編	67

## 1 計画策定にあたって

石見銀山遺跡の世界文化遺産登録は、本市観光にとって千載一遇のチャンスである。多くの世界遺産がそうであるように、石見銀山へも多くの観光客が訪れ大変な賑わいとなっている。

本市の観光振興を図るためには、石見銀山の魅力を高めていくことはもとより、市内の優れた観光資源の魅力を石見銀山以上に高めて行かなければならない。幸いに、本市には国立公園三瓶山、温泉津温泉、仁摩サンドミュージアム、大田市海岸と多くの優れた観光資源があり、磨けば輝く可能性を秘めている。

石見銀山遺跡の世界遺産登録により、今後、永続的な維持・管理をしていかなければならず、そのコストの地元負担は決して少なくない。そのコストは、何もしなければ生まれてこないものであり、行政はもとより市民全体で負担をしていかなければならない。

そのためには、本市の輝く資源を繋ぐことにより多くの経済効果を生みだし、結果的には世界の宝である石見銀山を将来にわたって守り伝えることができることになる。

今回の計画策定にあたっては、石見銀山とともに本市観光の両輪となるべき国立公園三瓶山の再生を主眼におくこととする。

また、計画策定の前提として、現在の観光を取り巻く状況を下記のとおり整理し、世界遺産と国立公園を擁する「おおだ」としての方向性を示していく。

### ■我が国の観光産業におけるトレンド・キーワードの整理

2003 年は「観光立国元年」と呼ばれ、ビジット・ジャパン・キャンペーンが始まった。その後、2006 年 12 月に「観光立国推進基本法」が議員立法で成立、2007 年 6 月に「観光立国推進基本計画」が閣議決定し（主な目標値は以下の通り）、そして本年 10 月には観光庁が国土交通省の外局として新設された。

[1]訪日外国人旅行者数	06年： 733 万人 → 10年：1,000 万人・36.4%増
[2]日本人海外旅行者数	06年：1,753 万人 → 10年：2,000 万人・14.1%増
[3]国内観光旅行消費額	05年： 24.4 兆円 → 10年： 30 兆円・23.0%増
[4]日本人国内観光旅行の宿泊数	06年： 2.77 泊 → 10年： 4.00 泊・44.4%増
[5]国際会議の年間開催件数	05年： 168 件 → 10年： 252 件・50.0%増

このようにオールジャパンの観光立国は着々と進行している中で、観光産業のトレンド・キーワードを抑えておく。

### **キーワード①：外国人旅行者（アウトバウンド客）の誘客**

世界観光機関によると、2006年の全世界の外国旅行者数は8億4,200万人を示しているが、2010年には10億人を突破し、2020年には15億6,000万人に膨れ上がると予測されている。世界的に見ると、実に純増だけで毎年5,000万人・5%増の勢いである。国内を見渡しても、北海道へのオーストラリア人旅行者の激増、各地温泉地の台湾・韓国・東南アジア人の激増などが既に始まっており、2007年の訪日外国人旅行者は835万人で4年連続増となっている。これらを観光用語では「アウトバウンド客」と呼んでおり、アウトバウンド集客力が国内の観光・レジャー産業の最大のテーマであることは間違いない。現在は約7割をアジア人が占めているが、将来的には富裕層が多いBRICS諸国（ブラジル・ロシア・インド・中国）が最大の誘客ターゲット国となるとも予測されている。

### **キーワード②：歴史的・文化的なおもてなし人材の育成**

いまだに“フジヤマ・ゲイシャ”色のイメージが強い日本の観光地に対して、今後のブランド構築にとって必要な方向性は、各地の歴史的、文化的な特徴を活かした“おもてなし”である。

なかでも外国人観光客向けには、代表的な国内都市以外では、世界遺産登録地に期待を寄せている観光関係者も多い。登録に至った歴史的な背景はもとより、異文化ゆえの情緒を伝えるホームページ、日本語直訳に陥らない表現方法、解説方法などの具体的なコミュニケーション手法を確立することが求められている。

つまり、地域にとっては単なる観光ボランティアの域を超え、地域観光人材のプロ化を計る必要がある、またそれらが雇用の受け皿となり得る可能性が充分にあるという認識を持つべきである。今後10年間で地域にとって必要な人材層は、観光プロフェッショナル人材となる。

### **キーワード③：国際会議の積極的な誘致（ビジネス・ツーリズム）**

国際観光振興機構によると、アジアにおける国際会議の開催件数（2006年）のトップはシンガポールで、次いで中国、韓国で、日本は4位（世界でも18位）である。約10年前はアジアのトップに君臨した日本は各国に抜かれており、件数自体も半減近くになっている。これら国際会議等の「ビジネス・ツーリズム」を誘致するメリットは、分野特定の定期的な開催により「国際」イメージと「分野」イメージを構築できることに加え、オフシーズン等の活用による平準化、一般観光客の6倍以上の消費額による経済効果、そしてプライベート再訪の潜在需要層へ繋がる。無名な観光地域であっても国際会議の誘致は戦略的な

観光施策と位置づけるべき時代である。

#### **キーワード④：脱・旅行代理店、パッケージ旅行から個人旅行へ**

一方、日本人の国内観光のキーワードは、脱・旅行代理店である。財団法人日本交通公社によると、国内旅行における旅行会社利用率は3割を切っており、団体客依存の大型温泉地の荒廃ぶりが示すように、エージェン特任せの観光地ほど崩壊している。

今後、地域側がすべきことは、個人客のニーズに合わせた旅行パンフレットづくりや、モデルコースの提供、さらには観光ガイドを増やしたり、レンタカー会社と連携したりなど、まさにこれまで旅行代理店が中間で行っていた業務を観光協会等自らが行うべきなのである。

昨年の旅行業法改正により、小規模な第三種旅行業者でも、一定条件下で募集型企画旅行の実施が可能となり、合同会社を設立している観光協会も出てきているという。逆に、未だに既存エージェン特任せの観光協会ならば、その存在価値はないと言っても過言ではない。

#### **キーワード⑤：新しいタイプの観光を熟知し、地域のもてなし構造の変革**

国土交通省は、「ニューツーリズム創出・流通促進事業」を推進している。ニューツーリズムとは「長期滞在型観光」「エコツーリズム」「グリーンツーリズム」「文化観光」「産業観光」「ヘルスツーリズム」「都市と農村魚村の共生」等を指す。まさにキーワード④における地域側が自主的に推進すべき分野と位置づけ、地域観光戦略を構築すべきである。

#### **キーワード⑥：エコツーリズム = 責任ある観光客を育てよ！**

90年代以降、持続可能な観光が重視されるようになり、我が国でも1998年に「エコツーリズム推進協議会」（現・日本エコツーリズム協会）が設立され、国際的にも国連が2002年を「国際エコツーリズム年」に指定しているなど理解と促進が図られている。同協会によると、国内のエコツーリズム認知度は72.2%に達しており、体験者が3.4%と潜在需要の大きさを表しているとも言える。その一方で、まだまだマナーの悪い観光客も少なくなく、2008年4月に施行されたエコツーリズム推進法によって「レスポンシブル・ツーリズム（責任ある観光）」の確立が期待される。

#### **キーワード⑦：グリーンツーリズム = 農林水産省主導から、雇用を創造する**

87年に制定された「リゾート法（総合保養地域整備法）」によるリゾート構想がバブル

崩壊で事実上破綻した折に、92年に農林水産省がグリーンツーリズム振興に着手した。94年には「農山漁村余暇法」を制定し、滞在型観光を楽しむための基盤整備を開始した。2005年時点では、農林漁家民宿は全国で3,671軒あり、年間で240万人が宿泊している。その他にもクライנגルテン滞在、子供向けの体験学習や修学旅行の受け入れ等も確実に成果に繋がっている。地域の新たな雇用に繋がったり、期待以上の効果を挙げている市町村も少なくない。

### **キーワード⑧：ヘルスツーリズム = 潜在市場規模は4兆円、医療と観光の連携**

社会経済生産性本部の「レジャー白書 2007」では、参加希望率の高い新たな旅で、「癒しの旅」が約67%で第一位になっている。以下、「大自然の魅力を味わう旅」「歴史ある街並みを訪れる旅」「世界遺産を訪問する旅」「博物館や美術館を訪問する旅」「地域の食文化を楽しむ旅」と続く。従来の温泉浴や森林浴と「ヘルスツーリズム」の大きな違いは、医学的な根拠に基づき、観光を通じて健康回復・増進を図っている点である。

例えば、福島県いわき市のいわき湯本温泉では、2001年から「温泉保養士」という新しい人材を育成し、現在94人の正式資格者がおり、現代版「湯治」スタイルを復活させようとしている。また長野県では「森林セラピー県」を標榜し、森林と観光の結びつきを強めている。さらには、同県茅野市では「メタボリック症候群向け健康ツアー」を開始したり、北海道上士幌町は、北大の免疫学者と協力して「スギ花粉症向けプログラム」を実施したり、香川県さぬき市や高知県室戸市では「ドルフィンセラピー」を活用して自閉症児の発達支援療法も実施したりしている。その他にも「健康ツアー」は続々と登場してきており、これらの動きに連動する形として、JTBヘルスツーリズム研究所（東京・港区）が企業向けの旅行型健康増進プログラムの提供も開始している。同研究所によると、ヘルスツーリズムの潜在市場規模は約4兆1,300億円と推計されており、高齢化社会における30兆円を越す国民医療費の抑制に繋がる医療と観光の連携強化が期待されている。実はこれらの“医観連携”が最も進んでいるのがシンガポールであり、最近ではインドやタイ、マレーシア、ドバイ等も“医療リゾート”を標榜して、外国人患者と付き添い家族の受入れ促進を図っている。

### **キーワード⑨：セカンドホームツーリズム = 都市と農山漁村の共生**

スウェーデンでは全世帯の約18%が「セカンドホーム」を所有し、友人・親戚から借り受ける場合を含めると国民の約半数が「都市と田園を往来する生活スタイル」を楽しんでいる。米国でもキャンピングカーを含む所有率が15%に達している。一方日本では、総務省

によると、現住所以外の住宅数は770万戸（2003年）あるが、「二次的住宅・別荘用」は36万戸と全体の4.7%に過ぎず、セカンドホームは定着していない。ただし、内閣府によれば、20～50歳代で33～46%が二地域居住の願望を持っているとも言われ、今後の都市と農山漁村の共生への期待度は高い。本当に豊かな暮らしとは“半農半街”のライフスタイルへ向かいつつある。

**【参考資料】**

- (1) 日本経済新聞本紙・経済教室面「観光立国への挑戦」2008年7月21日～8月15日記事を参考に加筆
- (2) なおキーワード⑧の健康観光の関連情報として、平成18年度石見地域産業振興方策調査「2市3町の広域課題検討並びに産業振興策における広域連携の方向性」のP.3～12「温泉療法における広域連携の在り方」

## 2 大田市観光の現状

### ■大田市全域と周辺

- ・平成19年7月、石見銀山遺跡が「石見銀山遺跡とその文化的景観」として世界遺産登録され、観光客が大幅に増加しており、全国的にも認知度は大いに高まった。
- ・テーマが共通する地域と連携をとり「世界遺産の旅」、「銀の道（シルバーロード）」、「巨木文化」といった新たなニーズを掘り起こす必要がある。
- ・石見銀山を訪れる観光客の多くは、そのまま市外の観光地、宿泊施設へ移動する日帰り・通過型の観光客が多いと推察される。現在、三瓶温泉並びに温泉津温泉をはじめとする大田市内の宿泊可能な地域へ誘導することで滞在型観光へ移行するように大田市（以下市と略）全体の観光振興に取り組んでいる。
- ・しかしながら、各観光エリアは、資源そのものが持っている魅力はあるものの、観光客を長時間引き止めるだけの仕掛けやシステムが不足している上、滞在型に必要な観光資源・機能を全て網羅しているエリアはない。各エリアが不足する観光資源・機能を補完し合い、エリア間の連携を深め滞在型観光に対応できる体制をつくる必要がある。

改めて大田市内のエリア毎の観光資源・機能を整理すると以下のとおりとなる。

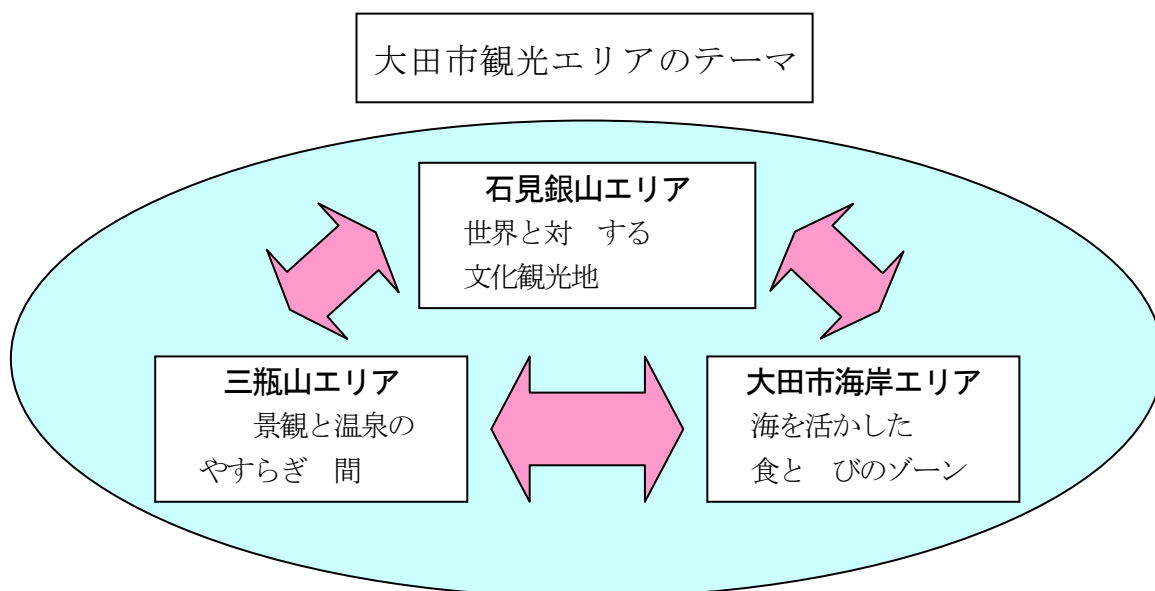
エリア別観光資源・機能担当表

機能 エリア	文化交流 世界遺産他	自然景観	温泉 健康増進	宿泊 集積	農水産品 食事メニュー	特産品開発	フィールド ミュージアム	学習・教育 体験	農・漁村 体験	スポーツ・ レジャー
石見銀山（大森）エリア										
石見銀山（仁摩・温泉津）エリア										
三瓶山エリア										
大田市海岸（根～温泉津）エリア										

に重要、重要、連携が必要



石見銀山エリア・・・大森町を中心とした仁摩、温泉津を含む「世界遺産」登録された地域  
三瓶山エリア・・・北の、の、東の、三瓶温泉を含む地域  
大田海岸エリア・・・根から温泉津までの海岸地域



### 3 石見銀山エリアの現状

石見銀山エリアの現状

- 平成19年7月に「石見銀山とその文化的景観」として日本で14目、アジアでは初めての山遺跡として、ネスコの世界文化遺産に登録された。
- 世界遺産登録直後から多くの来訪者が訪れ、平成19年の入場人数は71万3千人となり、前年の40万人から一挙に増加した。
- 登録を機に、テレビ、新聞等のメディアの取材が増え、全国に向けて石見銀山について情報発信し続けている。
- 登録直前から石見銀山方式のパークアンドライドを実施し、大森町内における交通渋滞の緩和と住民生活の維持に一定の成果を上げている。しかし、登録直後には、想定を超える来訪者の数に対応できず、バス待ちによる長時間の待ち時間となるなど、苦情をきたした。また、事前予約制により受入れている観光バスについては、ピーク時には1日に約70台を受入れるなど、混雑状態となったこともあった。
- 激に増加した来訪者の対応で、石見銀山公園のトイレの増設が機能せず、仮設トイレを設置し、その後新たにトイレを増設し対応した。
- 源間行きバスについては、大きな役割を果たしてきたが、観光客の増加に伴い、増設せざるを得なくなったことにより、結果として燃料費、ガス等により住民生活に支障をきたすことから、平成20年9月をもって廃止とした。
- 大森地区の入場、温泉津温泉街への宿泊については大きな役割となっているが、仁摩地区、温泉津地区の世界遺産エリアについては、ほとんど役割がない状態である。
- 町並みには登録前後から土産物、食事の出店があったが、引き続き土産物や食事の不足について、多くの苦情が寄せられている。

- 「どこが世界遺産なのか」がわかりにくいという もある。一方で、石見銀山ガイドの会などによる説 を受けながらの 策をした場合は、世界遺産について 得していただけるケースが多い。
- 石見銀山世界遺産センターがフルオープンし、事前学習をしてから、 策をするという石見銀山観光の推 モデルを示すことが可能となった。

## 4 石見銀山観光の問題点および課題

世界遺産登録以降、多くの来訪者が石見銀山を訪れている。この地を訪れる方々すべてに高いホスピタリティーにより 足してお帰りいただくのが究 の目標であるが、 な がら不 を いたままお帰りいただくケースもある。

石見銀山の世界遺産としての魅力、「自然や との共生」は言うまでもなく当然 守っていく必要があり、その上で来訪者を 足させる要 が備わっている地域を創り出さ なければならない。

石見銀山は従前より観光の町であった訳ではなく、地元文化財保存会の活動や地元団体 による石見銀山資料館の 、そして、町並み保存の取り組みなど大森町の住民による地 道な取り組みが最 的には世界遺産登録に繋がり、現在の石見銀山を創り上げてきた経過 がある。

そこには住民の暮らしがあり、それは世界遺産の中に含まれるものである。世界遺産登 録以降、住民にとっては生活の場でもある大森町に多くの来訪者が訪れ、住民の生活は登 録前とは一変したとこ も多い。

石見銀山観光を考える上では、そこに暮らす住民の いを受け止め、対 を重 ながら 進めていくべきである。観光を推進することと、生活を守ることは、場合によっては する点を指 されが であるが、このことは、世界遺産として登録された地であれば、 けて通れないこととして受け止める必要もある。

だからこそ、「自然や との共生」を前提に来訪者を えるためのあらゆる対策や 力 を確保する必要が生じる。そのことが、世界遺産の地としての責任であり、また、持続可 能な地域づくりの本 である。

これらをどの に解決していくかは大きな課題であるが、いずれにしても石見銀山観光 が「 」である時期に解決する必要がある。

このような観点で、ここでは石見銀山が える現状と課題を整理する。

### ①わかりにくい遺跡をどのように伝えるか

多くの世界遺産のようにシンボリックな 物が無いため、事前に予備知識がないまま 石見銀山を訪れた場合には、多くの来訪者は一体何が世界遺産なのかという 問を く。

フルオープンした世界遺産センターの活用、石見銀山ガイドの会の利用等現在でもその

対応策はあるが、すべての来訪者が利用出来ていないのが現状である。

出来れば事前に情報を得て来ていただきたいところであるが、予備知識が少なくても足してお帰りいただける仕組みを する必要がある。

## **②「歩く観光」と「龍源寺間歩行きバス」について**

平成20年10月から 源 間 行き の バス については、世界遺産登録の決め手となった自然と共生した 山遺跡である石見銀山であるにもかかわらず、 や ガスにより住民の生活が守れないという視点から全面廃止とし、石見銀山資料館から 源 間 までの往復6 余りを「 く」ことを基本に置くことになった。

石見銀山では、 し自 やベロタクシーの 業もされており、それらを利用できる方であれば、むし に 策できる が整ったとも言えるかも知れない。

しかし、一方で高齢者や がい者の方、体調の悪い方などに対して、「 く」以外の手がないという状 は、 ーマライ ーションを推進していこうとする世の中の流れから逆行することになる。

この問題は、現状の「バスの廃止」イコール「 く」ということでは抜本的な解決にはならず、何らかの手 を ずる必要がある。

## **③石見銀山方式パークアンドライドについて**

観光バスの受入れについて

観光バスについては、事前予約制、 用 場台数により、実 的に受入制 をしていることに繋がっており、賑わいと やかさを両立させようとする石見銀山観光のコンセプトを守る上で一定の成果をあげている。

パークアンドライドシステムについて

これまで数回の交通実験を通じて、修正を加えながら築き上げてきたパークアンドライドシステムは、 な地形である大森地区における交通 滞の解消に大きな 割を果たし、世界遺産登録後の来訪者が集中した ールデンウィークや の行楽シーズンを大きな もなく り切ることができた。

しかし、観光のピーク時には 源 間 行きバスの廃止による滞在時間の増も まって、

世界遺産センターの400台分の場合は、前10時から後3時前後の間は状況が続き、道の駅の待合の両が県道に連なり、最大で約2時間の滞が発生することもある。

#### ④石見銀山世界遺産センターの役割

世界遺産センターは、石見銀山遺跡の全体像を来訪者にわかりやすく伝え、様々な情報を得て石見銀山を観光するための重要な役割を持つ。

また、大田市全体の観光を考える上からは、大田市への入浴客である年間約160万人の約半数が石見銀山を訪れている状況からも、三瓶山、温泉津温泉等を含めた大田市全体の観光資源に来訪者を導く大田市の表玄関の役割を有しなければならない。

従って、今後はこの施設において石見銀山の歴史、解説はもとより、大田市内の観光地へ誘導を促し、この土地を訪れる人々に対し、この土地の地場産物等の地域資源を広く紹介するための重要な情報発信基地とする必要がある。

#### ⑤おもてなしの観点からの問題点

土産物・食店、特産物の不足

観光の楽しみは、見学に加えて、「泊まる」、「食べる」、「買う」の3要素といわれており、石見銀山における現状は、いずれも満足できる状況ではない。来訪者から寄せられる不満の多くが、「買うところ（物）がない」、「食べるところがない」ということである。

石見銀山では、世界遺産登録前後に少なからず新規の出店があり、以前に比べれば土産物や食事については増加しているが、やはり対数が不足している。

このことについては、主として民間の力を発掘すべき課題であるが、その前提となる観光客の誘導システムが不在であることなど、誘導手続及び出店に関する調整指針を整備する必要がある。

また、行政としては世界遺産センター、観光案内所、トイレ等の公共施設の有機的な連携を図る必要がある。

施設・トイレ等のスポットの整備については整備が進められているが、町並みの中や銀山地区内では、

既存のトイレの所在 知が不足している。また、今後、 の山 の遺跡 りをする来訪者の増加も予想され、トイレの設置について検討する必要がある。

また、「く観光」に対応した、町並みの中や 源 間 への 道、市道 いに する場所、ベンチ等の設置も必要である。

#### 外国人への対応

世界遺産に登録され、今後増加が見 まれる外国人への対応も重要な問題である。4言語（ 語・中国語（中国本土、台湾）・韓国語）のリーフレット、パンフレットが必要であり、説 についても検討を加える必要がある。

また、外国語ガイドについては、通訳 内士という国家資格が必要であり、有料ガイドは な状 であるが、ボランティアガイドとして活動している団体もある。今後は、石見銀山ガイドの会との連携を進め、行政支援も必要である。

### **⑥温泉津・仁摩地区の世界遺産エリアについて**

温泉津地区についても、温泉津温泉街を中 に多くの来訪者が訪れている。大森地区と同 に地形的な問題もあり、 場が不足している状 である。しかし、新たな 場用地の確保については、 が予想され、今後は、地元の 向を調整しながら検討していく必要がある。

町並み保存については 々に進みは始めているが、魅力ある町並みの形成のためには地元住民の協力が かせない。また、町並みの中に新たな店 の 開が始まりつつあり、「温泉」と「町並み」という強みを最大 活かし、 的にP していく必要がある。

仁摩地区では 、石見 跡がエリア指定さている。しかし、訪れる来訪者は大森地区、温泉津地区と するとかなり少ないのが現状で、次の課題となる。

温泉津地区、仁摩地区（サンドミュージアムを含む）については、石見銀山と連結する2次交通などこれからの課題も多い。

## 5 石見銀山観光の具体的対策

平成18年度に策定した大田市産業振興ビジョンにおいて、日本国内の世界遺産登録後の来訪者の動向を、登録により来訪者が増加したタイプ、大きな変化がないタイプ、登録前から減少向にあり登録後もその向が続いているタイプの3つに区分し、石見銀山については、タイプであると分している。

しかし、登録から1年が経過し、ガリン価格の高や世界的な経済機に見われ行きについては不である。

このような状下で全国に数多くある観光地の中で生きるのは「本物」であり、石見銀山は分にその要件を備えているが、現状の石見銀山であれば、「本物」をうまく表現できないまま激に入みが減少にじる可能性もある。

将来にわたって、石見銀山遺跡を「守り」「伝える」ためには、この時期に有効な対策を取らなければ、世界遺産を持つ自治体の責任を果たせなくなってしまう。

そのためにも来訪者に対して「おもてなし」のをこめたサービスの提供をし、その対価を得ることによる経済の結果、増を図り、遺跡の保に係るコストを生み出す仕組みづくりが務である。

ここでは、持続可能な石見銀山遺跡を目指すための具体的対策を示すとともに事業主体を示することとする。

石見銀山遺跡びへの入み客数の変化予測

### 1) 入込み客数の傾向

表 石見銀山びの入み客数の推移 (人)

	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年(予想値)
石見銀山(大森地区)	340,000	400,000	713,700	810,000
源間	56,567	95,260	363,152	370,000
温泉津温泉	52,835	52,283	62,958	64,000
仁摩サンドミュージアム	31,589	47,719	99,022	100,000

上記表のとおり、世界遺産登録を機に入み客数は的に増加している。特に大森地区び源間については発的な増加と言える。温泉津温泉が増していないのは、宿泊の施設中であるためである。仁摩サンドミュージアムについては、世界遺産登録とせ、



コミック、ドラマ、映画と続いた「時計」効果も大きな要因となり、人的入込み数が増加した。

平成20年の数値については、あくまでも予想値であるが、大森地区、源間については、ガリン価格の暴落が出始めた8月以降、対前年の数値を下回る傾向があり、さらに、源間行きバスの廃止の影響も少なからずあるものと考えられる。

表 石見銀山（大森地区）、源間 月別入込み客数 (人)

	平成18年		平成19年		平成20年	
	源間	大森地区	源間	大森地区	源間	大森地区
1月	993	4,200	4,200	6,000	12,106	23,700
2月	1,076	4,500	2,254	5,700	5,626	13,500
3月	4,128	17,300	11,799	21,100	31,870	66,800
4月	5,254	22,000	14,809	27,500	34,869	97,500
5月	14,501	60,900	26,018	73,000	44,051	113,100
6月	6,887	28,900	16,189	34,600	27,633	65,400
7月	7,208	30,300	28,763	50,100	29,933	60,300
8月	16,134	60,600	63,625	113,300	58,087	117,800
9月	8,238	41,800	52,174	85,700	36,830	69,600
10月	12,578	52,800	56,391	95,700	34,448	71,600
11月	14,715	61,800	65,550	152,500	40,000	75,000
12月	3,548	14,900	21,380	48,500	15,000	35,000
合計	95,260	400,000	363,152	713,700	368,453	809,300

平成20年11月及び12月については推計値

## 2) 今後の入込み予測と目標

平成18年策定の大田市産業振興ビジョンによる今後の入込み客数の予測では、日本国内の他の世界遺産の動向から、世界遺産登録後5年後である平成24年には大田市全体の入込み客数が年間1,190千人から2倍の2,380千人に増加するとしている。

表 世界遺産登録地における来訪者数の推移（基準年＝登録年） 大田市産業振興ビジョンより抜粋

西暦	法隆寺	姫路城	白神 山地	屋久島	古都 京都	白川郷	原爆 ドーム	厳島 神社	古都 奈良	日光 社寺	グスク遺 跡群
1989	112	117	48	82	96	86	87	96	113	134	49
1990	107	80	58	89	103	87	88	96	115	141	62
1991	104	85	75	106	100	89	91	92	112	140	61
1992	102	87	85	116	98	89	91	87	110	137	67
1993	100	100	100	100	98	72	90	91	108	123	112
1994	96	87	115	111	100	87	98	101	106	117	102
1995	89	68	168	123	98	100	98	97	105	115	95
1996	86	84	209	121	98	132	100	100	104	118	93
1997	77	70	224	126	95	139	108	105	103	109	98
1998	70	78	269	134	96	136	98	90	100	101	98
1999	67	70	320	124	95	137	101	83	101	100	103
2000	63	65	276	126	98	160	97	81	102	114	100
2001	67	69	278	137	100	185	97	81	105	106	98
2002	60	71	294	139	98	200	98	88	107	105	117

数値は% タイプ 白 山地、 島、白川 、グスク遺跡群

上記表の網掛け部分については、石見銀山遺跡と同タイプと分類された、登録後入 見客が増加した世界遺産である。

石見銀山遺跡の特徴的な点として、登録前年と登録年の増加率が 180%近いことが挙げられる。これは、この表にはないが 野 道についても同 様な現 象が起きており、昨今の世界遺産ブームの 影響と、それまでの認知度が 上がったことが要 因だと考えられる。

これらを総合的に 見れば、産業振興ビジョンで予測した平成 24 年に倍増となる数値を石見銀山については登録後 1 年で既に達成したことになり、ある 程度約 80 万人前後の入 見客数がピークであるとも言える。

今後の目標については、これからの石見銀山遺跡の知名度の上 昇による増加は見 込める。

併せて、三瓶山、温泉津温泉、仁摩サンドミュージアムとの連携を強めることにより大田市全体での入 見客を増加させ、90 万人 程度を目標値とし、最 大ラインとして昨年並みの約 70 万人から本年の見 見客である 80 万人の間を維持していきたい。

一方で、滞在時間の増や市内での宿泊を増やすことによる、市内消費額を増加させるなど、の 実現も必要である。

## 具体的対策

- (1) 人・環境に優しい石見銀山遺跡へ
- (2) 石見銀山遺跡と三瓶山をはじめとする観光関連施設を結ぶ2次交通の整備
- (3) プリペイドカードシステムの導入
- (4) 他地域との連携
- (5) 新たな魅力の創出
- (6) 新たな町並み利用策の検討
- (7) 温泉津・仁摩地区の強化
- (8) 「穏やかさ」と「賑わい」が両立する石見銀山遺跡へ

## (1) 人・環境に優しい石見銀山遺跡へ

### ①小型ラジオを利用した案内システムの導入 → 行政

わかりにくい遺跡といわれる石見銀山遺跡について、少しでもわかりやすくするための方策として、期 資が 的 価である携帯ラジオを利用した 内システムの導入や、コードなど 術を利用した方策を検討する。

### ②石見銀山パークアンドライドについて → 行政・観光協会・住民・事業者

住民生活を守り、結果的には な観光をすることにつながるパークアンドライドについては引き続き実施していく。基本的な考え方には変 はないが、改 が必要な場合には、行政、住民、事業者と協議のうえ決定していく。

### ③環境対応型車両の導入 → 行政・事業者

「自然との共生」がキーワードである石見銀山遺跡として、世界遺産センターと大森地内を結ぶ バスについては、バス事業者の協力を得ながら、 対応型 両を導入し への負 の 減に める。

また、世界遺産センターの公用 など公的 両についても、 対応型 両を導入について検討していく。

### ④龍源寺間歩へのアクセス → 行政・事業者・住民

多くの来訪者が集中する 源 間 へは、平成20年10月以降は バスの廃止により、 または自 等の手 により見学できる状 となっている。住民の生活の場でもある石見銀山であり、住民の 向は最大 させていくことは必要なことである。

一方 バス廃止により、 がいを持っている人、高齢者、小さな子ども連れの人等、くことが な人にとっては、 に い行 となる。

源 間 については、基本的にはどなたでも いただける施設であることから、住民との合 形成が必要となるが、人にも にも優しい石見銀山を創り出すため、いわゆる交通 者の方を優 する方法で、 型 両を利用する新たな 手 の導入を検討していく。

### ⑤「歩く」観光から「歩いて楽しい」観光へ → 行政・観光協会・事業者

石見銀山全体を考えると、「歩いて楽しい観光」を推進していかなければならない。また、自家用車やベロタクシーなどを利用し、観光客に利便策できる仕掛けも必要であることから、電動機付自転車の台数増を検討し、利便性の向上に努める。

また、源間へ至る道や市道に点在する遺跡への誘導、水前所の有効利用、駐車スポットの整備等により「歩いて楽しい観光」を創り上げる。

### ⑥来訪者に「優しい」石見銀山遺跡へ → 行政・事業者・住民

やかな住民生活の維持が前提条件であるが、やはり、来訪者に「優しい」石見銀山を目指さなければ、リピーターの獲得につながらない。

来訪者に「優しい」とは、前の源間へのアクセスの問題や、食事、土産物、トイレ、案内等いわゆる直接的な「おもてなし」ができていないかということと、観光客のこもった「おもてなしの気持ち」でおもてしているのかという点も重要な問題である。

地元大森町には、多様な考え方が存在し、その暮らしぶりも石見銀山の魅力の一つである。しかし、現状の石見銀山は来訪者に「優しい」のか。「来訪者をぶ町」にするのか。議論は必要であるが、来訪者に「優しく」「びない」町を目指すべきであると考えている。

### ⑦外国人来訪者への対応 → 行政・観光協会

外国人への対応として、多言語のパンフレットを作成する。また、案内も不備があるので対応する必要がある。また、ガイド機能を充実するためにボランティア団体への活動支援も検討する。

## (2) 石見銀山遺跡と三瓶山をはじめとする観光関連施設を結ぶ2次交通の整備

三瓶山関連に記載

## (3) プリペイドカードシステムの導入(再掲) → 行政・各有料施設・観光協会

三瓶山関連に記載

#### (4) 他地域との連携 → 行政

中国地方には広島県に2つの世界遺産があり、3つの世界遺産を巡るツアーの構成を図る。とりわけ、教育旅行には最適なコースとなり得ることから、広島県及び関係市との連携を強化する。

また、取県部から大田市まで構成する山文化や、島根県内においてもの文化を持つ南地域との連携や、・出との連携、石見地方との連携等島根県とも協議をしながら連携強化を図る。

#### (5) 新たな魅力の創出 → 行政・住民

世界遺産センターのフルオープンを機に、石見銀山はもとより、大田市観光の表裏の割を果たす必要がある。そのためには、旅行エージェントへの業活動や、的なPが不可欠であり、関係部とのな連携をとる。

また、市道の山をし、世界遺産センターからの山の望ポイントへの道びの設置を進める。せて、水所跡からの山への道も整備を進め、大保間の新たな魅力として対応型両を導入したツアーの実施について検討を進める。

また、地元住民の協力をぎ、戸水などを利用した水や軒でのなど、来訪者にもにもやさしい石見銀山の実現を図る。

#### (6) 新たな町並み利用策の検討 → 行政・住民・その他団体

土産物・食店の不足に対応するため、町並みのき家利用について地元住民、物件所有者、経済団体、P法人等と協議の場を設け、仕組みづくりを検討する。このことは、平成18年3月にまとめられた石見銀山行動計画においても示されており、に取組む必要がある。

長年かけて創り上げてきた町並みと調しつつ、やるのある事業者への支援を行うことが求められている。

大森町、温泉津町には歴史的な民家など、新たな魅力を付加することが可能な資源が在しているおり、このような条件をに石見銀山の町並みの魅力をきだすために活用する仕組みをり上げていくことが要である。

また、無 なる開発を ぐために、住民の自主性や主体性によって、世界遺産に さ  
わしい を創り出すための協 の仕組みづくりが 務である。

## (7) 温泉津・仁摩地区の強化 → 行政・住民・事業者

温泉津・仁摩地区については、泊や など 光 で史跡として価値の高い資  
源を有効活用できていないのが現状である。両地区への対策を強化することは、新たな  
石見銀山遺跡の魅力の提供につながる。

今後、世界遺産に指定された両地区のポイントについて、新たな誘客を図るために、  
旅行エージェント、石見銀山ガイドの会とタイアップし、新たな旅行 の を き  
かける。

温泉津温泉については、その地形的な要 から 場の不足が されているので、  
住民にも来訪者にも「優しい」町であるためにはどうしたら いのかという視点で、「温  
泉津版パークアンドライド」の導入も視野に入れ、行政・住民が一体となって取組んで  
いく必要がある。

また、小規模ながら スタルジー れる旅館街は情緒に れ、 な温泉にも まれ  
ており多くの宿泊客が訪れている。この を維持しつつ、 に宿泊客の増に繋げる  
ために、地元温泉街と大田市観光協会などが協議を進め、 な宿泊予約のシステム化  
を検討していく。

町並み保存事業の進 も 々にではあるが進められており、新たな店 開もあり旅  
館だけではない温泉津の町並みが創られ始めている。

宿泊だけでない 間の観光を含めた町とするよう検討を重 て、大森地区と温泉津地  
区の「二つの町並み」をキーワードに 的にP をすることにより誘客に繋げていく。

また、世界遺産として に価値の高い街道がそれ れにあり、街道を利用したトレ  
ッキングにも大きな魅力があり、街道を観光資源として大いに活用したい。

仁摩地区については、大森地区と温泉津地区に まれた地理的に有利な面を最大 利  
用し、 、サンドミュージアム、 を利用した 開が必要である。これについ  
ては、「豊富な地域資源の有効活用」の に記載する。

#### (8)「穏やかさ」と「賑わい」が両立する石見銀山へ → 行政・市民

世界遺産登録以降大森町民の生活は一変し、生活は登録前とは格段に変化した。石見銀山観光を考える上で、地元住民と協力を進める必要がある。

もちろん、石見銀山遺跡は地元住民だけの地域ではなく、人々共通の遺産であり、その価値を伝えていく必要もあり、経済面でみても魅力的な地域となり、多くの来訪者が訪れる地域となっている。

持続可能な石見銀山遺跡とするためにも、「穏やかさ」と「賑わい」が両立する石見銀山遺跡を目指していく。



## 6 三瓶山エリアの現状

### ■三瓶山エリアの現状

- ・大山 国立公園の指定要件にもなった による 野景観をはじめとする自然・景観、温泉、多 なる観光・交流施設などの観光資源の豊かさ、体験交流事業に関わる人的資源の豊かさを活かし、“ い” と“癒し” を提供する「 景観と温泉のやすらぎ 間」と位置付けられ、本市の観光振興の中で大きな 割が期待できる。
- ・石見銀山 には宿泊機能が少ないことから、石見銀山を訪れる観光客を滞在型に誘導するためにも、石見銀山（大森・仁摩・温泉津）エリアの温泉津温泉とともに三瓶山エリアの宿泊施設は重要な 割を担っている。
- ・ の ・東の ・北の ・三瓶温泉からの登山道、東の の観光リフトを利用した登山も中高年層を中 に数多く訪れる。
- ・ の の「三瓶山山 の 場」の自然景観、「 入れ」、「さんべ山開き」、「クロスカントリー大会」等の 行事・イベントによる集客もある。
- ・北の は、三瓶自然館「サ メル」、「小 林公園」を拠点とした三瓶フィールドミュージアムを構成しており、特に三瓶自然館「サ メル」は平成18年には約118,000人の利用を得ている。また、北の のバンガローやキャンプ場等の野外施設と三瓶温泉施設との 合により、温泉の機能性を付加した野外活動の場として、そのメリットを 分に生かした集客を進めていかなければならない。また、北三瓶地区は山村 学の拠点として取り組んでいる実 もあり、都市と田 の交流拠点 田 ツーリズムの拠点機能としての整備 び三瓶温泉浴と森林浴と健康回復と温泉の効果を活用した予 医学の機能の発 により魅力創出の 割を担っている。
- ・三瓶温泉は、かん の宿が民間の宿泊施設に生まれ変わり、国民宿 「さんべ荘」とともに、引き続き主要な宿泊機能を担っている。こうした宿泊機能と予 医学の観点を中心とした健康増進機能を連携させて三瓶温泉の集客力の向上を図る必要がある。北の の「三瓶 少年交流の家」は主に教育研修施設としての宿泊機能と 割を担っており、

教育旅行の誘致 の とつとして、あるいは、体育、文化活動の合宿機能としての活用に効果的である。

三瓶山エリアにおける観光関連施設・イベント等の 要は、以下のとおりである。

## 国立公園三瓶山における資源一覧

項目	名称	概要	最近の状況
施設	ミラドールさんべ	スキー運行時に営業する施設。それ以外の時期は自動販売機等での営業。鉄骨造2階建 694.7㎡。	H15～H19 利用者数： 47,229 人
	さんべ温泉スキー場	東の原の天然雪スキー場。観光リフトが、冬期、スキーとなる。2基 813m	H15～H19 利用者数: 171,072 人
	東の原観光リフト	東の原から大平山までのリフト。1基 856m	H15～H19 利用者数: 111,469 人
	西の原レストハウス	土産物・食堂。三瓶そばが名物。鉄骨造平屋建 412.5㎡	H15～H19 利用者数: 105,749 人
	太平山休憩所	太平山の休憩所。ここから眺める室の内は素晴らしい。	
	三瓶自然館サヒメル	自然系博物館。三瓶山のビジターセンターも兼ねる。	H15～H19 利用者数: 508,496 人
	北の原キャンプ場	家族連れなどで賑わうキャンプ場。オートサイト、キャンプサイトなど。	H15～H19 利用者数: 105,749 人
	三瓶こもれびの広場	げん、バーベキュー、食堂、売店、木工館、公園。	H15～H19 利用者数: 328,154 人
	三瓶青少年交流の家	宿舎、体育館、武道館、グラウンド、三瓶自然体験など合宿にも活用できる社会教育施設。	H15～H19 利用者数: 309,056 人 (宿泊) 50,461 人 (日帰)
	三瓶小豆原埋没林公園	小豆原地区で発見された約3,500年前の埋没林を保存展示。	H15～H19 利用者数: 250,410 人
	三瓶小豆原縄文の森公園	埋没林公園に隣接。古代ハス池がある。花見堀には色鮮やかなハスが楽しめる。	
	国民宿舎さんべ荘	三瓶温泉の宿。平成16年、平成20年に将棋の王将戦を開催。地元の利用(入湯、食事)も多く、国民宿舎として運営している。鉄筋コン造2階建・木造平屋建 3,896.1㎡ 収容人員 106人	H15～H19 利用者数: 91,363 人 (宿泊) 421,798 人 (入湯、日帰)
	四季の宿さひめ野	三瓶温泉の宿。民間企業が旧かんばんの宿を買取し07.04から開始。鉄筋コン造3階建 5232.3㎡ 収容人員 130人	H18 利用者数: 22,143 人 (宿泊) 28,921 人 (入湯、日帰) 《参考:旧かんばんの宿》
	湯元旅館	三瓶温泉の宿。この宿の風呂も源泉かけ流しで、温泉通が全国から訪れる	
薬師湯	三瓶温泉の外湯。源泉掛け流し。		
亀の湯	三瓶温泉の外湯。源泉掛け流し。		
自然	三瓶山	三瓶山は主峰・男三瓶(1,126m)をはじめ、女三瓶(957m)、子三瓶(961m)、孫三瓶(907m)などの峰	

自然		が室内と呼ばれる火口を囲んで環状に配列している。	
	東の原	大平山の斜面を利用した斜面は、冬季にはスキー場となる。春は放牧牛を見ながら山菜摘み、夏は涼を求めて観光リフトで大平山山頂からの展望が楽しめる。秋は女三瓶、室内の紅葉も楽しめる。	
	西の原	三瓶山表玄関である西の原。約60haの広大な草原風景が楽しめる。約40頭の放牧牛がのんびりとした雰囲気を出します。樹齢400年を越すための松は石見銀山の初代奉行大久保石見守が一里塚として植えたものと伝えられている。	
	北の原	三瓶の拠点となった北の原には三瓶自然館サヒメル、三瓶こもれびの広場、北の原キャンプ場などが集まる観光スポット。全国植樹祭、青樹祭もここ北の原で開催された。周辺には姫逃池があり、カキツバタが群生し、三瓶自然林を気軽に楽しめる遊歩道も整備されている。	
	登山道	三瓶山登山道として、東の原、西の原、北の原、三瓶温泉コースがある。	
	浮布池	悲恋伝説の残る池。歌人柿本人麻呂も句を詠んでいる。ピカボート、ベンションあり。	
	定め松	一里塚として植えられた。初代石見銀山奉行大久保長安が植樹したと伝えられている老松で、樹齢360年を超える。	
	室内・室内池	三瓶山噴火口とされるくぼ地。底部には室内池と呼ばれる火口湖がある。	
	姫逃池	悲恋伝説の残る池。ここにあるカキツバタ群落は県指定天然記念物(S43)。	
	三瓶山自然林	約100haの自然林。国指定天然記念物(S44)。	
イベント	三瓶高原カントリー大会	毎年8月下旬開催。	H19.08.17実施 1,306名参加(カークン参加者含む)
	クリーン三瓶	毎年5月第3日曜日開催。二十数回実施西の原中心に清掃活動	H19.05.20実施 約180名参加
	さんべ山開き	毎年4月第4日曜日開催。二十数回実施。山頂にて神事あり。	H19.04.22実施 例年約400名参加
	西の原の火入れ(野焼き)	三瓶山の防火対策と草原維持を目的とし、約10haの草地进行焼く。	
	さんべ祭	青少年交流の家、三瓶自然館、木工館の共催。	毎年10月下旬開催

食	三瓶そば	三瓶在来種による風味のあるそば。三瓶山の黒ぼく（火山灰）が栽培に適している。	
	ホロホロ鳥料理	キジ科の鳥。フランスでは、食鳥の女王と呼ばれて高級食材として愛されてきた。さんべ荘で味わうことが出来る。	
	くり園	三瓶の秋の味覚。	
	ジンギスカン	三瓶高原のイメージにあう、地元食堂による名物料理	
資源	曳き馬	西の原定めの松周辺で曳き馬に乗馬する。子どもに人気。	
	牛の放牧	西の原における肉用牛の放牧。	
	三瓶温泉泉源	孫三瓶と日影山の間であり、毎分3,000ℓの湧出量を誇る。	

## 7 三瓶山観光再生を図る上での問題点および課題

### (1) 三瓶観光における問題点の整理

平成 19 年における石見銀山遺跡の世界遺産登録による三瓶観光への効果は部分的と見られているが、これらを生み出した要は、立地的な側面よりも、観光地としての一体の方がより深いである。実際に、北の諸施設がオープンした平成 14、15 年度は年間 80 万人以上の入客数を誇っていたが、それをピークに一大幅に減少したの、現在は年間 60 万人前後とほぼ半ばいで推移している。また、来訪者の消費額は確実に減少しており、三瓶全体の観光入規模は減少の一途であることは間違いない。それに加え、ここ数年の三瓶温泉街の宿泊施設の廃業も重なり、地元住民にとって親しんできたはずの三瓶山から足が遠のき、観光一元客にとってもお目当ての施設以外に頼れないピンポイント観光地という位置づけになってしまっている。

つまり、三瓶観光における最大の課題とは、「観光地として一体的な取り組みがない 個々がバラバラの活動をしている」ことであり、言い換えるならば、石見銀山中部(大森地区)から遠くがあり、アクセスが悪いことが回してこない主たる理由ではなく、それ以前に、三瓶観光地内、並びに石見銀山と三瓶、または市全体における一体感がないと言える。以下、基本的な 4 つの問題点を挙げる。

#### ① パンフレットの統一性がない

まず 顕微的な問題点は、観光客のための“バイブル”となる基本パンフレットが存在しないことである。もちろん、施設別、目的別のパンフレットはあるが、県・市・施設とによりバラバラであり、統一感が全くない。

このような背景には様々な問題点が隠されているが、そもそも三瓶観光全体の「コンセプト」がないことが最大の理由である。特に、どのように、どんな形で一日、数日を過ごしてほしいか、というメッセージが全くない。「あるがままの自然の中で、優れた観光施設を、北のでも、南のでも、東のでも、どうぞ自由にどうぞ」という態度の発露にまっとうに、三瓶観光としての“おもてなし”がない。

#### ② 各組織の一体感がない

次に、三瓶観光の関係者とは、「国立三瓶少年交流の家」を運営する国(立行政法人国立少年教育振興機構)、「サメル」「森林公園」「北のキャンプ場」等の施設を保有する県(財団法人三瓶フィールドミュージアム財団)、そして、市が保有する「こもれび館」「木館」「市ケビン」を受託する大田市森林組合、「さ

んべ荘]「スキー場(リフト・ミラドールさんべ)」の「レストハウス」を保有・する大田市保養施設管理公社、そして大田市があり、その他にも三瓶温泉協会、振興会、民間企業・店主、自治会、個人などが在している。

石見銀山遺跡の世界遺産登録をえても、三瓶観光全体のめた協議がなされていない状は、割り組のといえる。

これらの状の開策としては、関係者の連協議会といったゆるやかなし合いの場から開始するだけでは解決に時間がかかりすぎることが予測される。従来の分では、立地的、アクセス的に、世界遺産登録の効果がよいという見方も強いが、観光地の立地・一ド面よりも人材・フト面の課題に起するところが大きいと言わざるを得ない。自主的な連携体制をるには、第三者的な観光・レジャーの家を加え、再生の中責任者(実者)を決めることから始める必要がある。

### **③ 三瓶内連携の不足**

三瓶山全体のコンセプトが希なためであるが、に自家用を基本に自回をさせるならば、サイン計画のが必要であり、逆に、トレッキング等の“きり”を基本とするならば、シャトルバス行などのが必要である。つまり、個々の施設に来たお客が他の施設へしやすいようなードとフトのがないり、いくらモデルコースをっても機能していかない。モデルコースづくりとセットで推進しなければならない施策は、例えば、東南北やテーマ別でエリアのゾーンを色分けしたり、地の花を区分けしたり、また、地図や道上での表示を目立たせたり、かくんだり、観光施設共通割引チケットやフリーパス等を導入したり、各種実験をしながら、客のを聞く機会を設けて、一層のを重ていく必要がある。

### **④ ターゲットの不在**

これも同に全体コンセプトと連動するが、三瓶観光の客層ターゲットがバラバラである。多くの観光地にありがな“訪れるみんな”に足してしい、という方美人的なメッセージは通用しない時代であり、“どんなライフスタイルの人”に最も強いメッセージを発するかが、ターゲットとなる。小学の子ども時代から三瓶山にれ親しんだ「地元住民」に対するメッセージと、石見銀山遺跡を目的とした「回観光客」に対する表現方法はそもそも異なるものである。また、セグメント別(分別)でも、小

中学生の修学旅行団体をターゲットにする 出し方や、中高年層のトレッキング層をターゲットに 出す方法、子連れファミリー層の2泊、3泊滞在型をターゲットにする方策など、個々の施設がバラバラで行うのではなく、三瓶観光全体としてのターゲットの優 位化、正シェアの見 めが必要である。

## (2) 国立公園と世界遺産が共存・共栄するまちとして取り組むべき方向性

本来、観光には、地域の光である優れた特色・価値を りとして示すこと、その光と を めて観る 味合いがあり、その一体化が らしい「旅」の成立となる。教育(修学)旅行をこの点から えると地域おこしの視点から新たな 出が求められる。そのために、地域の伝 ・文化・歴史・産業等を機 としての学習 材の開発が重要な を っている。

その基本となるのが「体験」であり、その体験の中 となるのが交流活動である。そこに携わる方々との語らいや人々の知 や歴史を知ることが重要であり、このような人々との の交流から新たなる地域の文化が生まれるのである。

本市では既に、「人と自然」「都市と農村漁村」「子どもから高齢者」をキーワードとした とづくりを基本コンセプトに、農家の家族の一員となつての農 業体験、 き、キャンプ、 楽等の地域に伝わる伝 文化体験など年間を通じた山村 学事業を 開している。

地域活性化をめざす上では、こうした体験を基本とした 少年との交流活動すなわ 教育旅行等は地域活性化には不可 であり、大きく すると えている。よって、本市の施策として、「観光の発 」「経済効果への 」「地域教育の振興」を地域活性の大きな と標榜する。

このような状 の中、国立公園三瓶山と世界遺産石見銀山遺跡が共存する本市は、世界遺産の地、石見銀山への来訪者の滞在地として三瓶温泉や温泉津温泉を「石見銀山癒しの宿」と位置づけ、それ れが持っている能力を 二分に活かし、三瓶全体 いては本市全体のホスピタリティーを高めていかなければならない。特に、石見銀山遺跡を訪れる観光客を三瓶山エリアへ確実な誘導を図り、三瓶山の持つ資源を活用した地域活性化をめざさなければならない。



### (3) 三瓶観光の再生の方向性

#### ① 中核施設の立地調査を吟味し、かつ、おもてなし人材計画の立案に期待

三瓶山エリアの課題の背景には、強力な中核施設がないことも理由の1つであり、現在、学区に「地域資源活用交流促進施設」の整備を計画している。この点については、しっかりとした立地調査、需要調査に基づく計画立案が条件である。地元人手人材の登用や、他地域からの人材の獲得なども計画から取り入れ、「三瓶観光おもてなし人材計画」の完成すべきである。

これからの観光は、自然・施設などの“モノ”を目的とした対応ではなく、その人物にまた会いたいという“ヒト”を目的とした観光地に生まれ変わるからこそが三瓶観光の再生条件となる。

#### ② 観光ミニ・インフォメーションセンターと観光コンシェルジェ育成へ

また、少なくとも東・南・北・西4所に「観光ミニ・インフォメーションセンター」が必要である。新設である必要はなく、既存施設の一角に目立ったスペースを置くだけでもよく、大切な点は施設としての機能と置かれる中核人材の養成である。例えば、既存施設に所属する手・中核員から公募し、三瓶観光再生プロジェクトチームを発足し、三瓶観光コンセプト・ワークショップを進め、短期的には東・南・北の4地区の共同パンフレット作りとミニインフォメーションセンターづくりから開始することも検討に値する。

三瓶観光はその広さから、コンパクトな観光にまとめ上げるのが難しく、目的別でも異なるため、モデルコース設定だけに留まらず、「カスタムメイド・コース」を認める人材育成も重要であると考え。その日の様子、イベントの有無などを把握し、お客様の年齢、経験、性別などの特性をみて“その日・その人に合った三瓶観光”を提案できることが大切であり、観光コンシェルジェ人材が配置されることで、全体の質向上が生まれてくるものと期待される。

#### ③ ターゲット別の集客力に向けた企画強化策

観光産業におけるトレンド・キーワード～で取り上げたように、新しい観光は徐々に各地で取り組み始められており、後手になればなるほどその集客力は弱くなってしまふ。例えば、ヘルス・ツーリズム（健康観光）における基本戦略は、まず住民を対象とした体系的なモデルづくりを行わせ、住民の健康増進と医療費抑制の関係を立上げていく必要がある。

一方、対外客向けには三瓶山の特徴を活かし、ミドルライト登山との組み合わせなどのメニューづくりも重要で、トレッキングガイドや三瓶山ミニ・ツアー（小・中・上）等を主催していく企画対応力も求められる。つまり、温泉療法医の確保に加え、温泉保養士・コーディネーター人材の育成を推進させるべきである。

その他のターゲットとしては、北の道を中心とした「小中学生修学旅行」向けの充実企画、「ファミリーキャンプ」向けの特別企画、「食のトライアスロンラリー（小・中・高、そば）」等の食クーポン共通特典など、今後検討していく必要がある。

## 8 三瓶山観光再生の具体的対策

前 の問題点を まえて設定した課題解決に向け、変化予測と目標を定め、より具体的な対策を示すと共に事業実施主体を 示することとする。

三瓶への入 りみ客数 び観光消費額の変化予測と目標

### 1) 直接効果

三瓶への平成 19 年度の入 りみ客数は日帰り 499 千人、宿泊 91 千人、合計 590 千人であるが、宿泊率が 15% 度と く、通過型観光地の利用形 となっている。

表 三瓶山への入 りみ客数の推移 (単位：千人)

年 (平成)	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
日帰り	540	522	512	529	679	753	549	555	545	499
宿泊	60	58	78	61	61	57	51	45	45	91
計	600	580	590	590	740	810	600	600	590	590
前年 (%)		3.3	1.7	0	25.4	9.5	25.9	0	1.7	0

観光客一人当たりの消費額としては、日帰りについては島根県の平 値の約 7 割 度の 4,000 円、宿泊については島根県の平 値の約 9 割 度の 23,000 円とし、観光消費額を推定すれば約 40.9 億円となる。

表 観光客一人当たりの消費額と観光消費額の推計値の (単位：円)

区分	島根県 (一人当たり)		大田市 (一人当たり：推定)	大田市 観光消費額	備考
日帰り	県内客	3,445	4,000	20.0 億	
	県外客	8,266			
	平	5,855			
宿泊	県内客	18,525	23,000	20.9 億	
	県外客	32,284			
	平	25,404			
				40.9 億	

また、平成 18 年度大田市産業振興ビジョンによれば、石見銀山遺跡の世界遺産登録による効果として、登録後 5 年後に市全体の入 りみ客数が年間 1,190 千人から 2 倍の 2,380 千人に増加するとしている。このう 、約 10% の 100 千人 度を三瓶山に誘客し、 に「健康づくり」、「アウトドア」の取り組みを充実させることで 50 千人 度を同 に誘客するこ

とをめざし、基準年での入り 客数の び率を 25%と想定する。宿泊率も現在と同一の約 15%で維持されるならば、平成 25 年度の入り 客数は日帰り 625 千人、宿泊 115 千人、合計 740 千人に増加するものと推定される。このときの観光消費額は 51.2 億円となる。また、入り 客数の増加による経済効果については、国立公園三瓶山と石見銀山遺跡の世界遺産登録効果による地域ブランド力の向上により、一人当たりの観光消費額が 30% 度上がると 定すれば、日帰り 32.5 億円、宿泊 34.4 億円、合計 66.9 億円となり現在の約 1.6 倍の観光 入を得ることが可能となる。

## 2) 他産業への経済波及効果

平成 18 年度大田市産業振興ビジョンにおいて実施した産業連関に関する調査より 定された本市の主要観光産業（宿泊・物 業・食 業）の経済 効果の分 結果を用い、今後本市の産業連関構 が変化しないと 定すれば、 に推定した平成 25 年度時点での 66.9 億円の観光消費額による本市内への経済 効果は 83.7 億円と推定され、その内訳は下表に示すとおりである。

表 平成 19 年度の観光消費額による経済 効果の推定 (単位：億円)

	観光消費額	一次効果	二次効果	総合効果
農林水産業	0	2.32721	0.53579	2.86300
業	0	1.29653	1.81596	3.11249
設業	0	0.20859	0.02863	0.23722
観光業	40.9	38.80592	3.71781	42.52373
サービス業	0	0.34765	2.10226	2.44991
計	40.9	42.98590	8.20045	51.18635

表 平成 25 年度の観光消費額による経済 効果の推定 (単位：億円)

	観光消費額	一次効果	二次効果	総合効果
農林水産業	0	3.80661	0.87639	4.68300
業	0	2.12073	2.97036	5.09109
設業	0	0.34119	0.04683	0.38802
観光業	66.9	63.47472	6.08121	69.55593
サービス業	0	0.56865	3.43866	4.00731
計	66.9	70.31190	13.41345	83.72535

## 3) 雇用効果

現状においては、国立公園三瓶山における資源一 に示す観光関連施設をはじめとする各種施設における雇用のほか、地元 店や農業関連（農、用 育、 が中）従

事業者が主である。前 のとおり、入り み客の増加によって、観光産業はも んのこと、農林水産業、 業への経済 効果が大きく現われることが期待されている。三瓶山全体として 32 億円を超える経済効果を推定する中で、新たな雇用が見 まれており、地域活性化につなげるよう取り組んでいかなければならない。

#### 4) 目標

以上の分 を まえ、基準年（平成 25 年度）の目標を以下のとおり設定し、三瓶の観光再生に向けた具体的対策の基本とする。

表 経済効果等基準年目標数値

目	平成 19 年度	基準年 (平成 25 年度)	備考
直 効果	590 千人	740 千人	1.25 倍
直 経済効果	40.9 億円	66.9 億円	1.6 倍
他産業への経済効果	51.2 億円	83.7 億円	1.6 倍
雇用効果	140 人	160 人	1.15 倍

1) 雇用効果については、観光関連施設に雇用される従業員数とする。

表 雇用効果対 施設

(単位：人)

施設名	平成 19 年度	基準年(平成 25 年度)	備考
ミラドルさんべ	4	4	
東の 観光リフト	4	4	
の レスト ウス	1	1	
三瓶自然館サ メル	10	12	
北の キャンプ場	5	7	
三瓶こもればの広場	7	9	
三瓶 少年交流の家	25	25	
三瓶小 林公園	3	3	
国民宿 さんべ荘	40	43	
の宿さ め野	37	45	
湯元旅館	3	5	
湯・ の湯	1	2	
合計	140	160	

## ■ 具体的対策

- (1) 温泉資源を活用した健康づくりの拠点化 → 民間・行政
- (2) 地域資源活用交流促進施設の整備 → 行政
- (3) アウトドアの拠点づくり → 行政
- (4) 教育旅行の推進 → 行政
- (5) 三瓶山の景観の保全と市有地の有効活用 → 民間・行政
- (6) 公社所有の観光関連施設取得及び管理 → 行政・大田市保養施設管理公社
- (7) 石見銀山遺跡と三瓶山をはじめとする観光関連施設を結ぶ2次交通の整備  
→ 行政・民間
- (8) 的確な情報発信 → 行政・大田市観光協会
- (9) 大田市への交通機関別アクセス経路の設定・提示 → 行政
- (10) モデル観光ルートの設定・提示 → 行政
- (11) プリペイドカードシステムの導入 → 行政・民間
- (12) 推進体制 → 民間・行政

## (1) 温泉資源を活用した健康づくりの拠点化

くから人々は温泉のもつ体によい保健 用を経験的に知って医療や保養に利用している。

「 事記」や「日本書 』にもすでに温泉の効能が記されており、 戸時代には「湯治」という形で広く保養に利用されてきた。すなわ 「湯治」は 候 の異なる温泉地に地し、日 の生活で したストレス状 から を解 したり、情報交 の場でもあったという保養の効果を 分に活用していた。

健康生活面から、温泉には大きく つの機能がある。医 が温泉 等で行う「医療」と「 養・保養」である。「医療」には 性 患に対する治療やリ ビリテーションが含まれる。「 養」は日 生活から出る の やストレスを取り ぐことで、時間で言えば1～ 日くらいを要する。

「保養」は 養に加え、体調を整え健康を維持したり体力を増進させる等、 的な健康づくりを行うことで、1 間以上を必要とする。従って温泉療養は、「医療」と「 養・保養」を合わせた で、ここで用いられる手 や方法が「温泉療法」である。最近では、

な医療への応用よりも、楽しく に行うことができ、しかも医 学的な 付がある健康維持、体力増強、生活習 の予 等一次二次予 の面での がクローズアップされてきている。

多くの温泉地では温泉水に体を す温泉浴と が主流であるが、温水プールでの水中 動やスポーツ、 の森林浴、海岸での 行 動、ヘルシーメニューや を提供する食事療法、ガーデニングセラピー、アロマセラピーなどを上手く組み合わせ、地域の特性を活かした 合健康保養温泉療法が理想形であり、温泉療養に しい医 の指導や協力は不可 となる。

### ① 温泉療法の目的

- 1) 予 医学的 )生活習 のリスク要 を き、予 法を体得する。  
) 的な健康づくりの方法を教育・指導・体験する。  
) 患の 期発見と 期治療を行う。
- 2) リ ビリテーション )体への 動負 に対する 応能力を高める。  
) 的な 応能を高める。  
)仕事、家 など社会的ストレスより解 させる。
- 3) 性 患に対して )生体の自 応と 能力を改 する。  
) 機能の改 を図り、健康増進を増強する。

- ) 等による基 治療法を最小 にしたり中止させる。
- )療養期間の長期化を ぐ。
- ) 患に対する 切な治療法を指導し する。
- ) の過 や による社会的不 合を ぐ。

## ② 三瓶温泉における具体的温泉活用プラン

1) 地域資源活用交流促進施設（国立公園三瓶山センターまたは三瓶ヘルスセンター）の整備～農林水産省農山漁村活性化プロジェクト事業の活用

設置予定 所 三瓶温泉街

2) 三瓶山エリアの魅力を再発見

エコロジー米、野 、わさび、山 等の地域産 と結びついた生 や加 のスペースを確保するとともに、三瓶山が有する地域資源、 温泉、自然、 楽等の伝文化等を組み合わせ利用者を える場として、温泉療法活用型の交流施設を設ける。現在、三瓶山エリアに不足している地域産 、加 の 入の場の提供となるとともに、特に温泉療法の場としてさんべ荘等との連携を強くすることによって、三瓶温泉の健康づくりの拠点としての 割を 確化させることとする。

3) 市内医療機関（大田市立 等）との連携

温泉を活用しての 性 患に対する治療、機能回復やリ ビリテーション、 やメタボリック症候群等の成人 予 の指導実 、健康 の実施の場等、 医の指導するメニューや健康回復プログラムを開発し、医療機関の施設と宿 と上記整備予定の施設により健康づくりのシステムが 受できる と体制を整えることとする。

4) 宿泊施設との連携

養は日 生活から出る の を取り くことで ～3 日の日 が必要である。また保養は 養に加え、体調を整え、健康を維持したり体力を増進させる等 的な健康づくりを行う必要性があることから1 間以上のコースが 当となる。こうした健康増進、元 回復プログラムを 成し、さんべ荘などの宿泊施設に宿を取らせながら、新たに整備予定の施設との連携により、現在の社会が求めるリフレッシュや癒しの 間や滞在による時間を 出した三瓶温泉を創出し、新たなる利用者を え入れる。

5) 等を提供する食事療法

三瓶山に豊富に存在する 折々の山野 を利用して、健康 向が強く、 イエット



にも寄 する本格的な 料理の提供を がけ、成人 や 性 の予 に する食事療法を三瓶温泉の大きな 割として位置づける。

#### 6) 森林浴・登山との組合せと連携

三瓶の 面は 4 年に国の 然記 物に指定されており、山 地方の代表的な始林の一つである。人に荒らされたことのない自然の 物園は 物に興味関 の い人でも 足度は めて高い。また中高齢者の中 に興味が高まっている登山は、一 で約 時間 度の が を呼び起こし、登山客が えない。これらの自然 や 木から発 されるフィトンチッド効果による森林浴と温泉浴を効果的に組み合わせたコースづくりを進める。

#### 7) 三瓶や石見銀山の自然や歴史に関する学習との組合せと連携

癒しやリフレッシュ効果を求めこうした場所に期待を寄せる 者あるいは 年層は、近年 に多くなってきている。石見銀山には世界の産銀のかんりの部分をまかない した歴史、三瓶山には、最後の 千 年前の 山活動により形成された 林等が存在した には数々の歴史や文化が宿っている。こうした自然や歴史、文化を「石見銀山学」 いは「三瓶学」として、利用者の興味を膨らませ、 の機能回復に するためのプログラムやコースを設定する。

#### 8) ガーデニングセラピー、アロマセラピーの機能と組合せ・連携など

健康づくりの拠点として、温泉と医療の 合の他に のリフレッシュに効果のある 各種取組を組み合わせることで楽しく なる温泉療養の場としての機能強化を図る。

## (2) 地域資源活用交流促進施設（国立公園三瓶山センター）の整備

エコロジー米、野、わさび、山等の地域産と結びついた生や加のスペースを確保するとともに、三瓶山が有する地域資源、温泉、自然、楽等の伝文化等を組み合わせて伝える場として、交流施設を設ける。現在、三瓶山エリアに不足している地域産、加の入の場の提供となるとともに、さんべ荘等三瓶温泉の食・宿泊施設の地元産入を進める。

## (3) アウトドアの拠点づくり

国立公園三瓶山をはじめとする本市には、とりわけ中高年齢者に目が高まっている登山やトレッキングに度な開が可能な三瓶山（完約時間度）を三瓶東の道を経すればでも能することが可能なコースを有している他、三瓶を取り巻く自然道は（石見銀山地区も含めることが可能）イキング、トレッキング、サイクリング、コースによっては、マウンテンバイクも可能なを有している。

また、自然体験、アウトドアの拠点に位置付けている北のゾーンには、オートキャンプサイト7区画、一般サイト1区画、ケビンについては市が7、県1の他、多目的ホールや店を備えた管理やシャワー、ランドリー、トイレ等設備を有し、そして、間近に三瓶温泉をえ、近ではのない温泉がすぐ近くにある北のキャンプ場を有しており、島根県び中国地区では指のステージをっている。この優れた機能を十分に活かし、北のキャンプ場を拠点として、前のイキングやトレッキング、サイクリングなどを体験し、また、する三瓶少年交流の家、三瓶自然館や木館の用する々な体験プログラムを活用することにより、自然とのれあいや学習の楽しみを一層体することができる。

さらには、「初めてのキャンプ教室」や「親子で楽しむアウトドア教室」などを的に開催することにより、新たな利用者、リピーターの得に繋げ、「アウトドアの宝 三瓶」というイメージを定着させていくことが重要である。

また、三瓶の観光施設との連携は必であり、キャンプ場利用者に対して、三瓶温泉をはじめとする優れた資源を有する三瓶山全体のさをさせる仕組みを構築し、とかく、キャンプ場の利用のみで完結しがな利用者を、三瓶山をさせることに繋げていくことが必要である。

そのためには、各施設の一体的な取り組みが必要であり、の、東の、そして

三瓶温泉にそれれ施設の保有を目指す本市において、北の 地区、とりわけ北のキャンプ場のさらなる有効活用について検討する必要がある。

#### (4) 教育旅行の推進

昨今の教育旅行は従来の観光型から学習型・体験型に大きく方向 されており、世界遺産石見銀山、国立公園三瓶山を える大田市にとっては、大きなチャンスと言える。

まず、三瓶山の資源である大自然をベースに、三瓶自然館、国立三瓶 少年交流の家等と連携をとり、実際に自分た で った山野 を った らづくりや、北の の自然観察 での野 観察会、キャンプ場での新 な食材を った食事づくり、観察会など 々な体験学習の機会がある。

また、石見銀山の歴史を学習することをメニューに加えることにより に を増やすことができ、三瓶山と石見銀山を組合せることにより市内での宿泊の可能性が広がり、広島の ドーム、 島 社、そして石見銀山の つの世界遺産を るコース設定も可能である。

また、大田市が現在行なっている山村 学制度との連携も想定される。小規模 の教育旅行を誘致し、山村 学のメニューを体験するなど、現在の大田市が行なっている仕組みの中での取り組みも可能である。

教育旅行に取り組むことによって、経済効果も少なからず得ることは出来るが、都会に住む子どもた に対する「田 に対する理解」を促し、そして、地元の人々とのれあいによって大田市を「第 の るさと」として 識させることにより、将来の交流人 の 大に向けて 開をしていくことも必要である。

今後、島根県とともに 業活動に取り組み、教育旅行を推進し新たなターゲットの得に繋げていく。

#### (5) 三瓶山の景観の保全と市有地の有効活用

##### ① 三瓶山の景観の保全

- ・ の 整備について、地元自治会等と連携を取りながら、三瓶山を 望す

る の景観を に維持し、 の を る 道の設置なども検討する。また、三瓶山の全体の景観の保全を図り、三瓶の魅力を高めていく。

## ② 三瓶山の麓にある浮布池周辺に広がる約40haの山林の活用

・都市住民の自然体験、農業体験の場を確保するとともに、観光農園（バラ・リン・ブルーベリー）や 付農園等による都市住民の滞在・宿泊ニーズに応えるメニューの開発。（三瓶温泉宿泊施設での長期割引宿泊メニュー、地元農家によるグリーンツーリズムの導入、北の の教育研修施設での宿泊、キャンプ場の利用も含め、合宿等の多 なるニーズに対応する。）

## ③ 三瓶上山地区の市有地の活用

・市有地（林）の有効活用の観点から、市外在住者に土地を 出し、ある 度自 に うことを認め、定住化に繋げていく方策も検討していく必要がある。

## （6）公社所有の観光関連施設取得及び管理

### ① 大田市保養施設公社所有の施設の取得と管理について

公社が所有する観光関連施設には、さんべ荘、 日 、 道（リフト）、ミラドールさんべ、 の レスト ウス、温泉管理所がある。

国立公園三瓶山と世界遺産石見銀山を擁する本市にとって観光振興を推進し、交流人を増加し、外 得を標榜し地域の活力を創り育てて行く上で必要不可欠であり、これを活用しなくては当地域の存在にすら を し振興を するほどの資源である。こうした 下にあつて、国立公園三瓶山に存在する国民宿 さんべ荘は、豊富な湯 を る三瓶温泉を源泉とする つの宿泊施設のうちの一つであり、宿泊者並びに 者を含めて年間1 万人の滞在者を受け入れており、施設は、大浴場を中 に 、 たせ湯、ジェット 、 湯等、温泉 者の関 を引く魅力を備え、宿泊定員1 名の地元利用をも含めた三瓶温泉を代表する宿泊施設である。加えてさんべ荘は登山道が近 しており登山 はトレッキング いは森林浴等を目的とした宿泊客には利 性の高い拠点施設として利用する上で めて都合の い に位置している。

続いて の レスト ウスにおいては、三瓶山の中 に広がる代表的な景観を有する の の に位置し、三瓶山への入り み客を える表 関の 割を有している。ここは の農業生産者との連携を図る 地であり、生産される産 を するばかりでなく、地域の食材を調理、加 してもてなす 食施設として、その機能の強化を図る

ことが今後に求められている。また、ここでは が であり、その が 大な 景観をつくり出しており、 の中における交流や いの場所として活用されなければならない。

リフトについては、東の に設置されており、国立公園三瓶山への登山 び コースの入り として機能している。同時に 折々に三瓶の変化に富んだ自然 を活用して楽しむことが出来るアウトドアスポーツの拠点施設として かつことの出来ないミラドルさんべを整備している。 の広大な は 期 時には、東の スキー場として機能するポテンシャルを有している。 にミラドルさんべは、観光リフトの を支え、リフトを利用する利用者の 施設として機能している。温泉管理所は、三瓶温泉の泉源管理施設であり温泉資源を活用する上では不可 なる施設である。なお、大森に大田市保養施設管理公社が経 している 日 については、施設は民間からの 物件でありその経 を民間等へ 渡すべきと考える。

以上公社が有する施設は、三瓶山を訪れる観光客や温泉入浴者、登山客をはじめとするアウトドアを 向する現代人はも んのこと島根県民の いの場として、いずれも重要な 割が期待される施設であり、世界遺産石見銀山とともに ることのできる本市の地域資源と位置づけなければならない。

その上で今後は、「温泉を とした医療と地域資源の連携と活用」「アウトドアの活動拠点」といった考え方を国立公園三瓶山が向かうべき地域振興の両輪のベクトルとして位置づけ、いずれの施設ともそのベクトル推進に際して かせぬ要 と えなおし地域振興につなげて行く必要があるものと考えている。

## ② 市による観光関連施設の取得管理

- ・基本的には公設民 型の とし、指定管理者制度を導入し、指定管理者を定め、民間活力を活かした地域づくりを進める。
- ・ 性が しく、公 性が高い施設 び事業は、市の直 、業務 による も検討する。

## ③ 各部門の施設・運営面の現況分析と対応策の方向性

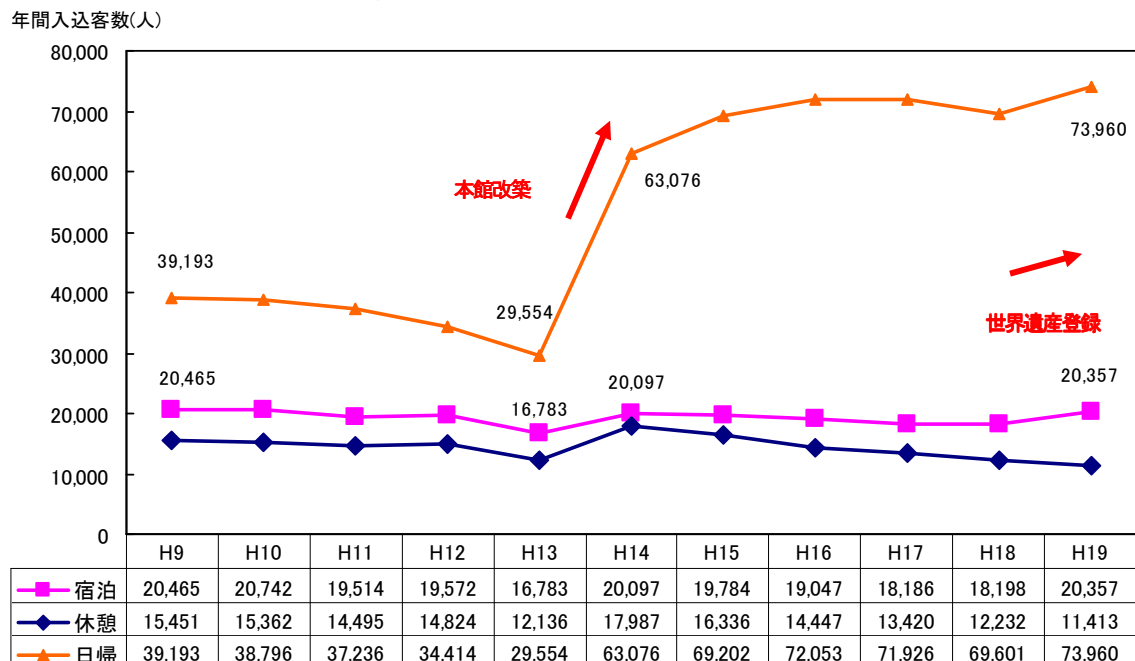
ここでは、各部 別の現状分 と課題 出、ならびに今後の対応策の方向性を示すこととする。

## 1) さんべ荘

平成7年と平成14年の増改築・新築により合計約3億3,000万円の事業費を投入しているが、その後も単業利ではを出し続けている（見かけ上の）。ところが、全体経状の悪化により、平成11年以降は（部）減価をしておらず、年間推計2,500～3,000万円、9年間で2億円以上の未計がある（は財務データ参照）。ここでは計は行わないが、正当な減価計上並びに管理費付などを実施しても「単」は確保されている状と推定される（実も）。つまり、増改築・新築、その後の設置などの設備資は客数の増加・定化をもたらし、一定の資効果を達成したと見てよく、部単で見れば定経を支えたことになる。

各地の国民宿が戦っている中で、さんべ荘（宿泊定員106名）の経状は健に値するものとする。62年12月の開業以来、年間「宿泊」者数は18,000～20,000人前後の幅で推移し、大幅なみも進まない（年間最高記録は平成7年度の21,164人）。一方「」者数は、開業から平成7～8年までは年間16,000～17,000人前後で定していたが、平成11年以降に激にみ、増改築で平成14年以降りすが、その後は減少が続き、平成19年は12,000人を割ってしまった。その一方で「(日帰り)入湯」客数は平成14年以降年間70,000人前後をキープしており、宿泊入湯の利用者合計は6年連続10万人を突破し、平成19年が過最高の10万5,730人を記録した。

さんべ荘 指標① 年間入込客数（宿泊・休憩・入浴）の推移

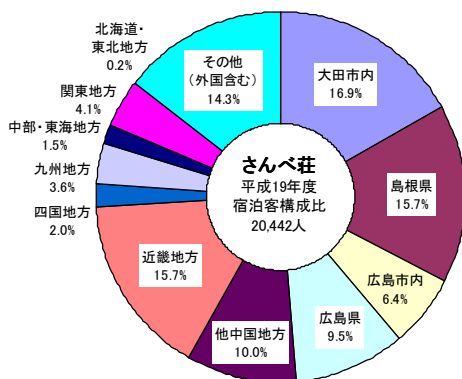
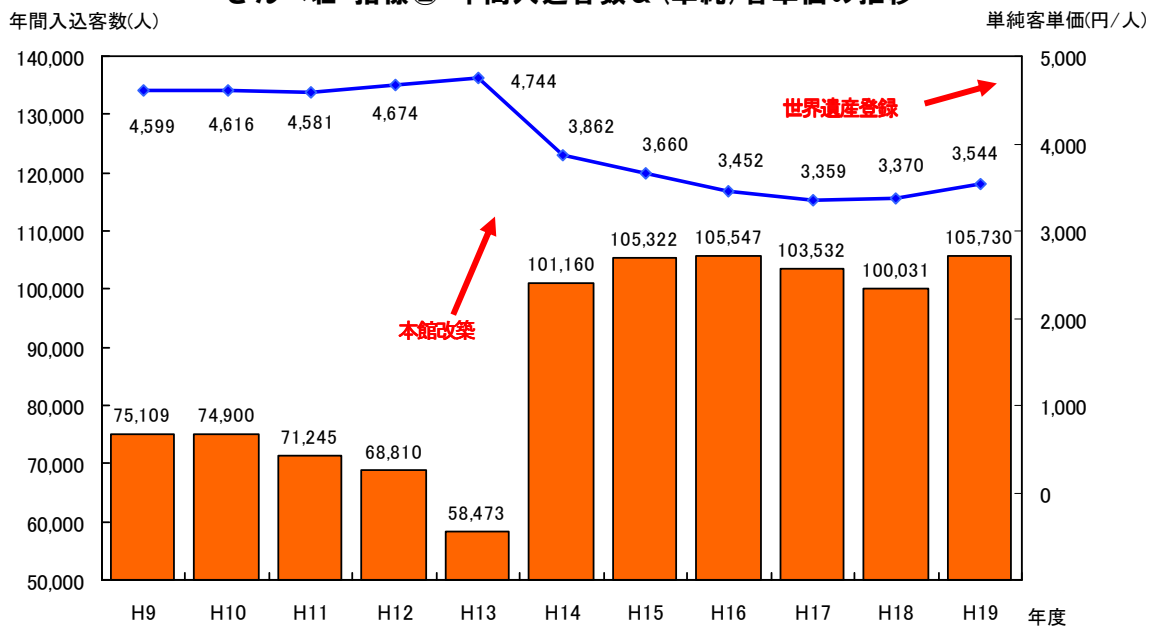


これらの定経の背景には、外的要因としての宿泊施設による集約的な集客力の維持や、石見銀山遺跡の世界遺産登録に関連した需要等があり、内的要因として別館新築、本館改築、充実などの経費が挙げられる。その一方で、下図が示すとおり、日帰り入浴客の増加により、客単価（単純平均）の下がであり、高等による材料費や光費の上がが予測される中、今期は宿泊料の値上げも計画されている。

客層分には実施されていないが、今後しっかりした客データ管理・活用が必要である。者の的な回では、**年齢別**が、70歳代30%、60歳代40%、50歳代20%で9割を占め、**団体構成別**が、「少人数グループ」40%、「地域団体」30%、「二人連れ」20%、「個人・ファミリー・学団体」10%となっている。これらから推察される既存客層は“**地元高齢者**”が的に多く、40歳以下のファミリー層はど取りまれている。

さらに宿泊客データによると、**居住地別分**は下図の円グラフの通りであるが、「地元（大田市民）」は3,445人で全体の7分の1にしかすぎない。

## さんべ荘 指標② 年間入込客数 & (単純)客単価の推移



「島根県」を含めても6,660人と3分の1 度にしかならず、宿泊の3分の2は「県外」であることが分かる。県外の県別上位は、「広島県」3,256人、「大府」1,248人、「 県」1,123人、「山 県」1,003人、「山県」650人、「福 県」539人等であり、する「広島県」(広島市含む)が15.9、その他の「中国地方」が10.0となり、島根県内も含めると全体の6割前後が「中国地方内」ということになる。過 には「地方」からのスキー客が多かった時代もあったが、現状では3.6%しか占めておらず、また「外国人」の取り 目はまだまだである。

また、全室アンケートによりお客 の を に しており、昨年度はウ シュレット付トイレの改修や 等の えをしたり、食事メニュー改 なども手掛けたり、



客も定期的に実施しているが、CR（客関係管理）までのきめかきはない（下表参考）。さらには新規エリア、新規客層へのプロモーション戦略はど行っていない。

これまでのを表現するならば“守りの経”でしかなく、“め”の部分を感じられない。例えば、別館「の旅」もグレードの割には本館とのサービス内や価格が中半であり、大向け旅館の域を脱していない。今後は、地元にされる“民日帰り温泉”と、主に県外客を中とした“・情緒のう滞在型温泉”の在からの脱がテーマとなる。

「々と流れ出る豊富なお湯に会いに行く。何度でも足をびたくなる宿」をコンセプトにきき大田の文化にれる格調高い宿を目指した宿りを進める。

**【参考】温泉旅館の客層分析と客層ごとの対策のきめ細やかさ（例）**

	分	区分	対	点、対応策
1	宿泊	個人客	一般(直予約)	認知ルート、動機
2	宿泊	個人客	エージェント経	一般リピート化、モニター化
3	宿泊	団体客	エージェント経	個人リピート化、定例化
4	日帰り 会のみ	団体客	地元法人・グループ	提、事優遇
5	日帰り 入浴のみ	個人客	地元・観光	回数、共通施設割引、湯り手形
6	日帰り 食事のみ	個人客	地元・観光	提、特別、1
7	日帰り 入浴会	団体客	地元法人・グループ	提、事優遇、切
8	特別(プライル)	団体客	地元・の個人	特徴づけ、体験
9	特別(地元格)	個人客	地元・の個人	地元住民の特化、度化
10	特別(法人・団体)	個人客	自や法人等	地元法人の特化、定例化
11	特別( )	外国人客	韓国・中国・台湾など	外国人向け対応研修

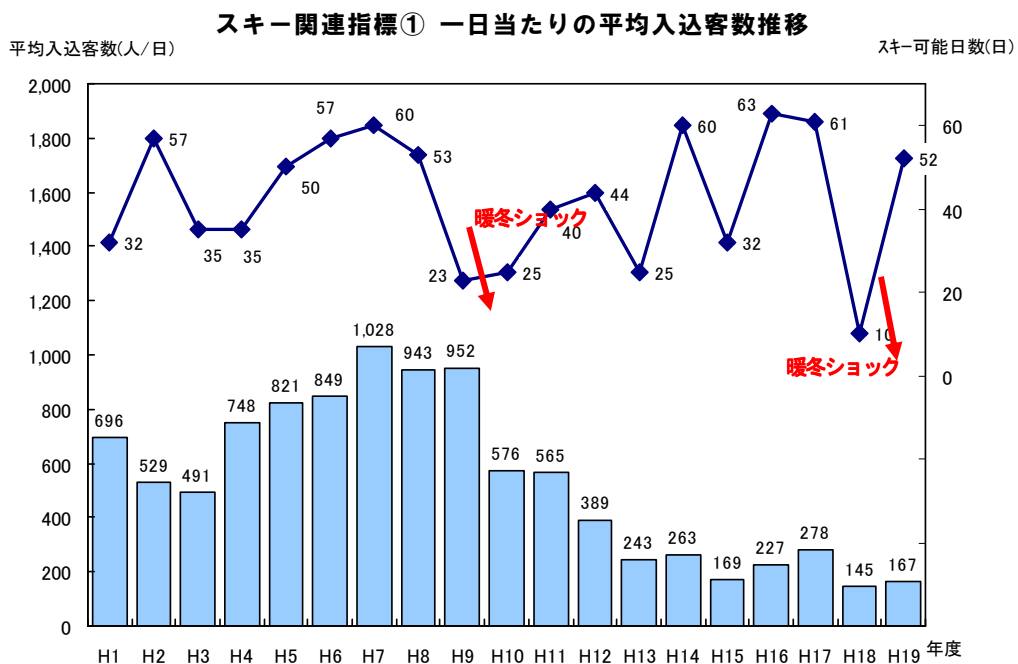
）「小温泉公園」再生ミーティング資料（野リゾート）を基に加筆成（月産業資料2006.1月）

## 2) 東の原関連部門

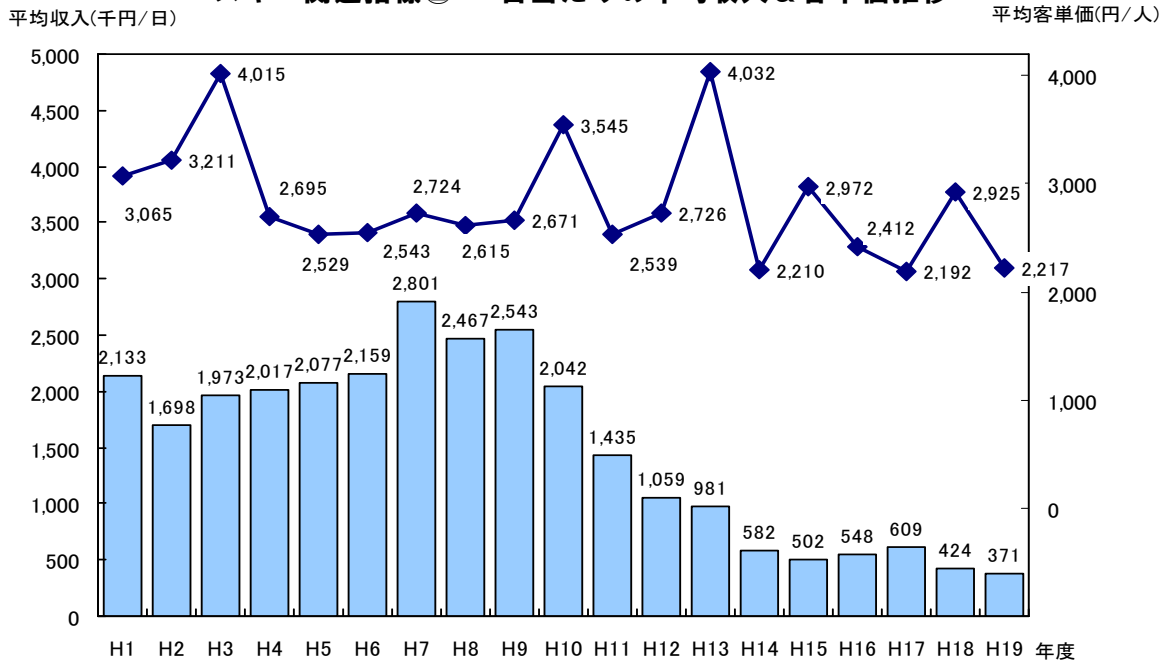
三瓶観光 道とミラドールさんべは実 上、東の における と見なすことが出来るので、ここでは 東の 関連部 として えて分 する。

平成3年度に第1リフトとミラドールの 設等に約3億7,914万円、平成7年度に第1リフトとナイター 施設等の 設に約1億9,000万円、合計約5億6,914万円の事業費を 入しているが、平成9、10年度の“ ショック”により、平成7年度のピーク時の 上(約1億7,000万円)の半分に激減し、この2年間だけでスキー関連2施設で 約9,000万円の に陥っている(減価 後)。その後は、言わば“ 小 ”の経費 減型の経 が続いてきただけで、年々 上も減少し、ついに平成18年度は2施設合計 上で1,700万円を割り み、ピーク時の10分の1以下となった。財務上、見かけ 上も実 的にも であり、平成11年度以降は(部 )減価 をしておらず、年間推計3,000~4,000万円、9年間で3億円以上の未 計がある( は財務データ参 )。まさにロス・センター(不 部 )である。

ここで すべき点は、平成7年度の 加 資( 大計画)の 当性に対する 価であるが、当時の 資回 計画資料がないので一 には しにくい、 事情からみ取れば、それまでの経 調状(平成6年度に 一 )や、スキー場入り み客数が平成5、6年度と4万人を突破するなど増加 向にあったこと等を見る り、一 に 過大 資だったとは言い く、結果 として、温 化予測が出来なかったと言わざるを得ない。それよりも、 ショック後の平成12年度の経 改 計画によるスキー関連部 の廃止・民活に対する指 ・提言がなされた時の の方が経 責任は大きいと言える(前 参 )。



## スキー関連指標② 一日当たりの平均収入 & 客単価推移



また、前図は12～3月のスキー可能日数（折れグラフ）と入れみ客数（グラフ）、上図は客単価（折れ）と一日当たりの平均収入（棒）の推移を示している。平成9年度の“23日ショック”、平成18年度の“10日ショック”が徹底的ではあるが、一時的に客数は激減し、それに伴い収入も下降の一途である。最期は一日当たり平均1,000人が来場し、客単価も250万円/日以上だったのが、現在は同150人、同40万円/日がやっとである。

このように“スキー場閉鎖（スキー場に行かなくなった）”は“スキー客（スキー客のものをやらなくなった）”へ繋がっている。これらは全国のスキー場の多くが直面した共通問題点でもあり、スキー場経営の“過剰競争の時代”の中で破綻・廃止・閉鎖が続いている。当地も平成13～14年に一度決断すべきタイミングを逸しているが、再度その決断の時が来ているのは明らかである。

現在ミラドールさんべ（156）は4～11月は実業態であり、オフシーズンの公共性の観点から見ると、現業態での存続は大変であり、ゴールデンウィークや夏、冬のシーズン等の三瓶山ハイキング・トレッキングにおける利活用を見れば、現状においては自主性は高い。そこで、リフトと一体となった三瓶山全体観光計画における位置づけを以下のとおり確にし、公共施設として活用していく必要性がある。

三瓶山は、昭和38年に大山国立公園として入された。国立公園とは、同一の

景型式中、我が国の景観を代表すると共に、世界的にも 取りうる 出した自然の 景であることが認められたものであり、日本国民共通の財産である。

その国立公園の中には特別地域が設けられ、その中でも特に重要な地区として特別保地区が指定されている。

三瓶山にも特別保地区が指定されており、中でも三瓶山を形 成する外輪山から室内にかけての地区については、三瓶山の生い立 や、自然が創り出す景観美を実際に体験できるとともに三瓶山の自然の特 質を 実 に表現した 望を有する。

このような特別保地区は通 立 入りが 多 くな っている。しかし、三瓶山は観光 道を利用することにより、多くの人た が 楽しむことが出来る 備えて いる。

国立公園の最も 味のある区域であり、後世に伝えていかなければならない特別保地区を実際に体験 できるということは、 重なる自然についてあらためてその重要性について「 つかせ」、「大切なもの」を「実 」させ、そして「守り」、「伝える」ことを「 発」していく大きな 割と を有している。そのことは、 いては日本の国土を健全な状 を保 、将来にわたって日本の自然 を守ることに繋がる。

このような地域を有している三瓶山だからこそ、一般の観光客は のこと、登山客を含む、自然体験・野外活動を指向する層、 び日本の次世代を担う 年層の修学旅行等、教育研修の場としての 地であり、それを活かすために今後も引き続いて 道を維持、 続していくことこそが、その優れた自然や景観美を多くの人々と共に共有するのが国立公園の であると共に、国立公園の指定を受けている三瓶山の 割であり、大田市の である。

そして、付 するミラドールさんべについては、観光 道を機 としてのビジターセンターの機能を せ持った野外活動・自然体験の拠点として位置づけ、アウトドアショップの誘致を検討し有効活用を図る。

に、登山をはじめ大自然の中に かれて と体をリフレッシュするアウトドア体験は、健康づくりのみならず人と人との繋がりをづくり、多くの 間を得ることができるという魅力を備えている。登山をはじめとするアウトドアスポーツには基本的には 性や年齢制 がなく、年齢や の がなく楽しみ 足し得る幅広い内 が存在する。

例えば、体力強化が目的ならばロングコースを登山でしたり、会やコミュニケーションづくりに基本を置くのであれば、イキングやキャンプを楽しむこともできる。度な激を向するならば、ロッククライミングやのりにトライするコースの設定も可能である。その他にもアウトドアでは、物観、きのこり、流り、バードウォッチング、カー、ウインドサーフィン、ンググライー、パラグライー等日ではおよそ体験することのできない内が存在している。

もん東のでは下での不足問題もえてはいるものの、のコンディション次第ではスキーやスーボードを分樂しめる。に東のの面では、パラグライーやンググライーもこなすことが可能な台を整えている。加えて今日のペットブームに眼を移すならば、大で自然ながんだんに三瓶の野を形成していることから、例えばペット者が望む動物が日のからたれて自にりまわることができるドッグラン施設の整備、いはラジコン機ができる間も設定可能なを備えている。

本市は、以上に示したような国立公園三瓶山びそののや資源を備えており、これらを現代人に最大に提供するための割、三瓶山アウトドアスポーツ拠点化構想を推進することとする。

### **3) 西の原レストハウス**

従来施設の化にい、平成7年度に8,209万円の資をして新たに設されたのレストウス(92)は、「三瓶そば」の中施設の位置づけを期待されていた。しかしながら、過の活動記録を見るり、本業のレストランに加え、そば、そば体験、農産市、各地物産フェア出、そしてクロスカントリー大会なども重なり、“方美人型の分経”であった。本来の三瓶観光の“の基点”という機能とはく、平成9年度の約4,218万円のを上をピークに減少の一で、平成19年は約1,415万円までんでいる。客観的な価としては、部としての割・目的を広げすぎたマネジメント分が悪化の主たるとされ、公社全体経の優位として、学地区のさんべ荘のを定させるので一で、東の(スキー場)との(レストウス)に対して、個別の方策を出しきれずに、現場へのや人材登用も進まず、中半な位置づけで動きが取れない状であったものと推測される。

平成9年以降のは、人件費と材料費の経費カットを中とした“小”し

かしてきておらず、数値を見る限り、地元客の利用も少なく、スポット観光の流れ客による“流経”であった。今後の課題としてすべき点は、三瓶観光の“観光基点”としての「公共性」を重視することである。

すなわち、観光インフォメーションセンターとしての“ ”りから再構築し、物産、トイレ、食、イベント企画など一般道における「道の 」や、高道における「サービスエリア」と同等な機能を持たせるべきである。この場合はあくまで公が前提の指定管理者活用がされることになる。具体的な方策を検討するならば、北の「こもれび館」のレストラン機能、東の「ミラドル」、そしての「レストウス」の3拠点の料を一本化し、公設民として指定管理者制度を活用した“( )さんべ・食のトライアングル( 中)”のような出をしていくのも検討に値する。いずれにせよ、当該施設は“ ”づくりから再構築が必要であり、単なるコストカットやメニュー変といった手法に頼らない抜本的な改が求められ、三瓶観光の“ ”の要づくりに対する方策が求められる。

また、賑わい創出のための集客機能強化策として、児がしてべるキッズスペースやペット者からのニーズのあるドッグランスペースを設置する。せて、三瓶産の、 、フルーツなどの市などのイベントを開催することにより、集客効果を高める。

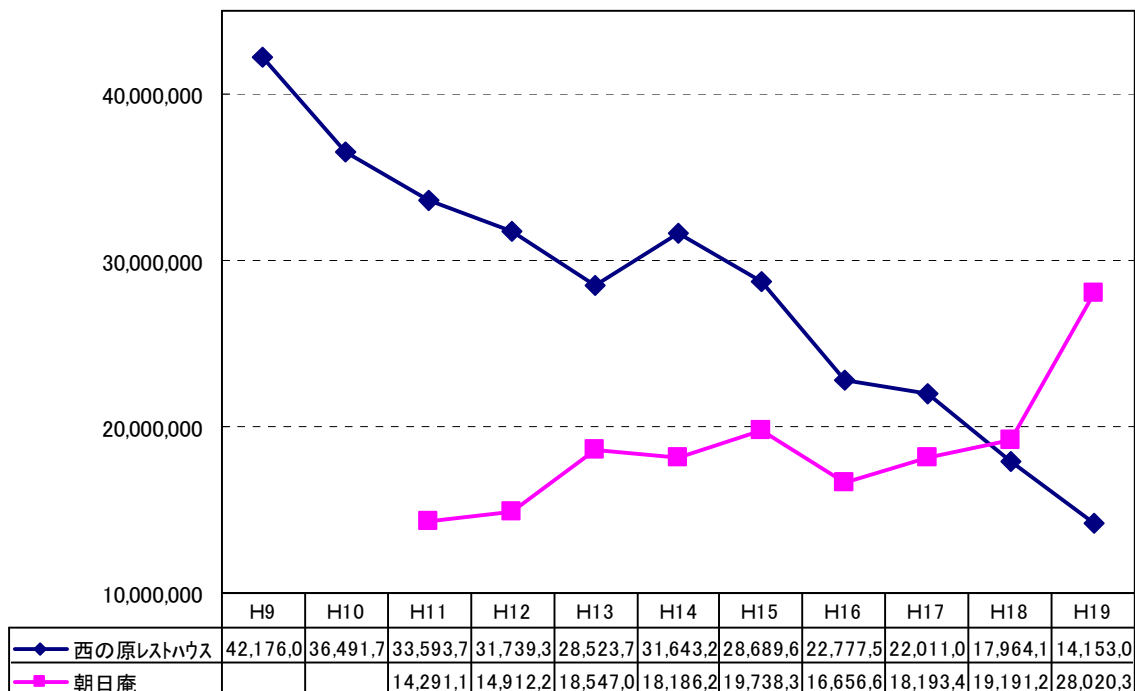
#### **4) 朝日庵**

のレストウスを新設してから4年後の、平成11年に約3,055万円をかけて、世界遺産登録予定の大森地区にある民家をし改して開業したのが日である。諸事情はあるにせよ、この2施設の合計上高が4,000万円台で推移してきており、平成18年から日の方が上回り出している(食事上だけならば既に平成15年から日が上回っている)。結果的には「三瓶そば」の中施設は、のから大森に移ったこととなり、三瓶そばの効果をった出店は、共い状を生み出し、世界遺産登録の直的な効果が強い大森地区の日の増となったと解できる状である。

しかしながら、日のは開店当から経費れでから脱できず、一度も(部)減価を実施していない実情で、3,000万円を超える定資産は価のままである。やっと平成18年から業利(減価前)でし、19年も増増を達成しているが、数(44)規模などを考すると大幅な増を確保するのはである。

今後の方向性としては、業ベースで化したので、物件であることから、公社で公益性を重視する必要性はなくなり、民間への業渡を前提とした民活が望ましい。その際の一の検討事としては、未計分の方法である。

公社 部門別「西の原レストハウス」&「朝日庵」売上推移



## 5) 温泉管理所

温泉管理所（泉源）は、市からの管理であり平成16年度までは年間350万円前後の分湯料による入があったが、平成17年度以降は半額程度の約160万円に減少した。そもそも事業ではないのでにならない度の事業として位置づけられ、正業務のによる正費との支を続ける事業である。

#### ④ 三瓶観光再生に向けた今後の取り組み

##### 1) レジャー・リゾートの再生条件における基本的な考え方

昨今、レジャー・リゾート業の事業再生が増えているが、基本的に“新スポンサー”（事業再生会社）による再生手法としては、[1] 経 新経 ・ 者 、 [2] B や B （経 は従業員による企業 ）、 [3]経 コンサル指導 資 入のみ、の 3つのタイプがある。そして、どのタイプであれ、事業再生会社が着眼する新経 の基本戦略は以下の 3つ と言われている。

まず、事業体が える 務 である。民間であれ、公的セクターであれ、レジャー・リゾート業の のケースの どが、過 の「過 資」であることは らかであり、 に現在は年度事業としては 化できていても、減価 できない負の資産が重 になっていたり、過 設備がコスト高を生み、結果として年度事業の を してしまっている。 に、これらの負の資産の を優 するがゆえに、人件費を り、設備保全を りし、サービスが 下し、といった“負の連 ”の経 に陥り、資 の行きまり（銀行支援 止）となる。これらは現在経 の責任ではなく、過 経 の責任りが なのだが、この過 ができない企業に再生の道はないと言って い。

第二に、数値の 的な見直しである。これは、「 上指標」と「経費指標」と「利 指標」の つから構成される。多くの のケースは、 なる経費カットしか実 ししていない。コストをカットすれば利 が上がる、という単純な考え方はリゾート・レジャー業のような“ ”や“ 動”を提供する にとっては通用しない。事業再生における重点指標は「 上 集客力向上」「経費 生産性向上」「利 キャッシュフロー改 」と言われている。リゾート・レジャー業の 上は客数 客単価であり、新規客の動機づけ（キャンペーン・タイアップ等）、既存客のリピーター客化（クーポン化、メンバー化等）、新サービス・アトラクションの続々 入といった づくりが重要となる。また経費抑制においては、暇な人を 何に無くすか、設備の 率をどのように上げるか、 がテーマであり、 と集中による最 コストの見 めが重要になる。そして、シーズン性に連動したコスト構 と、通年化や平準化の による単月・単 ・単日のキャッシュフロー改 が求められる。 なる経費カットは経 者の責任 れでしかなく、 客を し、従業員の士 を 下させ、サービスを 化させる悪 にしかならない。

第三に、経 層の 客 向への である。これは、前 の「 上指標」の向上とも連動しており、大別すると「既存リピーター客分 」と「新規客創 」の つである。多くの のケースは、 的な 客分 をしていないと指 されている。“ 的に”と



いう意味は、「お客アンケートをやりっし」、「イレクトメールをりっし」も第点であるということである。経層がやるべきことは、“今”の客のニーズに合致する「ト・モ・サービス」をにし、経資源分することであり、かつ、“日”の客に向かってに情報発とコンタクト活動をするのである。取会議や部会議、従業員ミーティングだけに時間を割くのではなく、お客への直おもてなしに的に参加し、直生のを聞くこと、そして、施設の外のネットワーク構築のための人づくり、コンタクト活動を永続的に続けることである。

第に、従業員のモチベーション向上である。レジャー・リゾート業は「サービス業」であり、それを担うのが従業員である。従業員足度が向上しないり、客時にからのは生まれず、サービスの的向上は有り得ない。つまりサービス業の最大目的である客足度も上がらないのであり、従業員を最高のにする方策こそが、東京ディズニーランドリゾートが成した最大の要とも言われている。つまり経層がすべきことは、フト（人材）への資をし続けることであり、定期的な強会、外部研修、ビジョン共有・情報共有、現場主体制の構築、と提業などをししていくことが求められる。

そして最後に、ード加資である。自主再の場合は、キャッシュフロー改が前提となるが、再生ビジネスが入る場合は、務したのに新マネーが入され「リバージョン」と呼ばれる施設リフォームに手が加わることになる。“”と“動”はマンネリ化しないので、新されないードやサービスはと動をえない。最小資本で期的に新できる人的サービスを回させながらも、時代トレンドと客需要をみんだード施設の新のりしがレジャー・リゾート業の経手であり、すぎててもすぎてても資効率は上がらない。これこそがレジャー・リゾート経ウウそのものである。

## 2) 今後会社が所有する施設運営の方向性

公社の施設対応策のは々あるが、ここでは全施設の今後のの方向性を検討する。なお下表が現の市の方による平成20年度以降の体制の方向性である。これをまえつつも、今回の多的な分結果に基づくを総合的に検討する。

■各施設の運営予定（見込み）■

施設名	平成 20 年度	平成 21 年度以降	備 考
国民宿 さんべ荘	公社	指定管理	平成 21 年度以降は、公社 整理の進 による
道	公社	市直 は指定管理	平成 21 年度以降は、公社 整理の進 による
ミラドルさんべ	公社	指定管理	平成 21 年度以降は、公社 整理の進 による
の レスト ウス	公社 (経 )	指定管理	平成 21 年度以降は、公社 整理の進 による
日	公社	業 渡	民間施設 借
温泉管理所	公社	市直 は指定管理	

まず、国民宿 さんべ荘は、性的観点からも民活性の可能性はあるが、さんべ荘が、市内の自治会や 人クラブの利用が多いことなど、これまで果たしてきた 割である地元に される温泉宿としての機能も に重要である。また、三瓶温泉の数少ない宿泊施設として今後もサービスの提供を 続することが重要であり、三瓶観光に かせない施設であることから指定管理による が 当である。

公社経 分 で見たとおり、東の の公 スキー場（ 道・ミラドルさんべ）の の 割は完 し、公共スキー場としての自主再 は するのが 当である。

ミラドルさんべは今後アウトドアの新たな拠点としての位置づけも想定でき、 道は ～ の公共観光施設として一 は直 化し、その後指定管理という となる。

道だけでは、将来的にも 性の向上は しく、あくまで三瓶 観光にとって必要ある施設として位置づけられる り、観光インフラ予 内での 続となる。

の レスト ウスは、三瓶 観光の拠点として え続けるならば 道と同 な 続方法となる。 方式や 方式も としてはあるが、中 半 な で新たな課題を生み出すリスクを考 すると、前 の通り、食のトライアングル構想（ の、北の、東の ）による一 の方が い切った戦略的な と言える。一方、 日 は民間 渡が基本であり、公共 し続ける理 は見つからない。温泉管理所は源泉管理でもあり逆に民間 渡は考えにくく、公設民 の指定管理者制度が 当である。

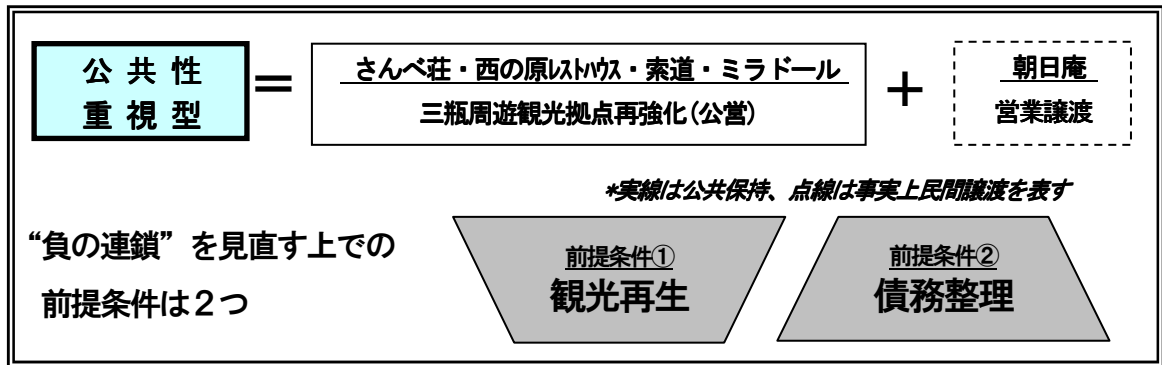
■ 会社の各部門における「収益性」「公共性」「民活性」のまとめ ■

施設名	備 考	性		公共性		民活性
		現在	将来	従来	将来	今後
国民宿 さんべ荘						
道						
ミラドールさんべ						
の レスト ウス						
日						
温泉管理所						

1) 「民活性」とは、公設民（指定管理）、民間への業 渡等を含む

以上を組み合わせると、公社全体経 における方向性は以下のとおりとなる。も  
ん、必要充分条件となるのが「三瓶 観光再生計画」 び「 務整理」であることは  
言うまでもない。

■ 会社の各部門の今後の運営の方向性■



3) 公社組織の今後について

ここまで、公社が経 に携わっている施設についての分 を進めてきたが、大田市保  
養施設管理公社という財団法人としての 割は えている。設立から一 して三瓶観光  
を 引してきた組 であり果たしてきた は大きく、公社なくして三瓶観光はあり得  
なかったと言っても過言ではない。

しかし、結果的に多額の負 を え、公社としてその 済をする能力は既になく、存  
続していくのは不可能である。

よって、大田市保養施設管理公社は解 することとし、その 務については、大田市  
が 補 約に基づき補 することとする。

## (7) 石見銀山遺跡と三瓶山をはじめとする観光関連施設を結ぶ2次交通の整備

バス、ジャンボタクシーの確保、定期観光バスの運行などを通じて行なう。観光客の増加による石見銀山遺跡への過度な集中の回避、市内の他の観光スポットへの分散による滞在時間の短縮に繋げることを目的とした交通手を市により確保する。

## (8) 的確な情報発信

アクセスやモデルコースについて、的確な情報発信がなければ魅力を持たない。ホームページやパンフレットを充実させ、わかりやすく情報提供をするとともに、あらたにITを活用した取り組みも進めていく。

また、石見地方で組織している、石見観光振興協議会が提唱する「なつかしの国石見」というキャッチコピーを石見地域全体で活用し、広めていこうという取り組みで、大田市としても取り組むこととする。

### 1) 石見銀山世界遺産センター等の有効活用

多くの観光客が訪れる石見銀山の中でも遺跡全体のガイダンス施設としての役割を持つ世界遺産センターを観光協会の機能も利用しながら情報発信の一つの拠点とする。また、ロード銀山、温泉津里あい館等の施設についても、「道の駅」の役割を担う必要がある。

### 2) 観光情報について

大田市観光のトータルページが必要 → 大田市観光協会において対応

#### ・宿泊情報のシステム化

宿泊施設によっては、ネットでの予約システムを導入しているところもあるが、多くの施設では対応できていないのが実情である。すべての施設で予約システムの導入は現時点では難しいため、観光協会において集約型の情報提供システムを整備する。

#### ・観光ルートの掲載

今回設定したアクセス経路と観光モデルコースをわかりやすく伝える。

#### ・観光情報の刷新

観光情報の刷新が求められる。各観光地の情報はもとより、花、

- 、イベント、等の的確な情報発信が必要である。
- ・外国語対応（英語、中国語（北京、台湾）、韓国語）
  - 今後増加が見込まれる外国人観光客に向けての対応が義務である。
- ・スマートフォンの利用
  - ブロードバンド化が進み、動画情報の提供が主流となり、スマートフォンでの情報提供は有効な情報発信となる。石見銀山の観光地の状況をリアルタイムで情報提供などが想定される。
- ・観光施設「石見銀山」「三瓶山」「温泉津温泉」の周辺地区の施設の新設
  - 現地で買い物をした観光客が、同じものをもう一度購入でき、それに付随して、あらたな観光地に入る機会を増加させる。多くの観光店が参加することにより魅力が高められる。観光協会が受け皿となったネット通販事業の展開が今後必要になる。
- ・各施設、個店のPRとの連携 → 各観光施設
  - それぞれのPRを充実させ、それらリンクで繋げていくことによる相乗効果を生み出し、大田市全体の魅力をアップさせる。

### 3) パンフレットについて → 行政において対応

情報発信型と着地型のパンフレットが必要

情報発信型

- ・現在の「おおだ」を活用
    - 観光ルート、おすすめルートの掲載
    - 石見銀山から各市内観光地へ
    - 外国語への対応
- 着地型
- ・価値が大いに用いられるものとする。
  - ・「石見銀山みてあるき」型の三瓶山、温泉津、仁摩を構成する。
  - ・観光ルートをわかりやすく、見やすくして利用しやすいアクセスマップを構成する。

効果的なパンフレットの

情報発信型、着地型ともに効果的なものが需要である。

情報発信型

- ・主にこれから大田市を訪れる観光客に対して

- ・ 、メールでの資料 求者
- ・ エージェント
- ・ 近 の道の 等
- ・ 市内の各観光施設
- ・ 県内の宿泊施設
- 着地型
- ・ 主に大田市に 着した観光客に対して
- ・ 市内の各観光施設
- ・ 近 の道の 等

#### 4) T関連

携帯 で コードを利用したシステムの構築

- ・ 目的別、エリア別に コードを利用したシステムにより観光客の利 性を向上させ、 せて各施設等の誘客増をはかる。
- ・ 各個店の協力が必要であり、観光協会が となり推進する必要がある。
- ・ 現在 自の動きもあり、それらとの連携も必要。

#### 5) 市内全域での チケットの取り組み

市内の各エリアを繋ぐものとして、 チケットへの取り組みも必要である。しかし、チケット代 の高額化や事務が になるなど課題も多くある。

そこで一つの みとして、各施設の入場 を割引 として え、その入場 を提示すれば団体料 いたするという方法も検討していく必要がある。

いずれにしても、観光客が する仕掛け りが必要であり、市内の有料施設間で協議をする場の設定が 務である。

### (9) 大田市への交通機関別アクセス経路の設定・提示

別添資料のとおりとする。

### (10) モデル観光ルートの設定・提示

石見銀山を訪れる観光客へ三瓶山をはじめとする、市内の観光スポットへ を図るためテーマ別に観光ルートを設定・提示する。

## (11) プリペイドカードシステムの導入

プリペイドカードシステムを導入し、公共施設はも ん地域の中小事業者活動を促して  
て共通利用体制を確立し、施設に えるポイントを付 するなど観光客の目 に立った  
利なシステムの 大を図る。

## (12) 推進体制

### ① 三瓶再生プロジェクト体制の構築

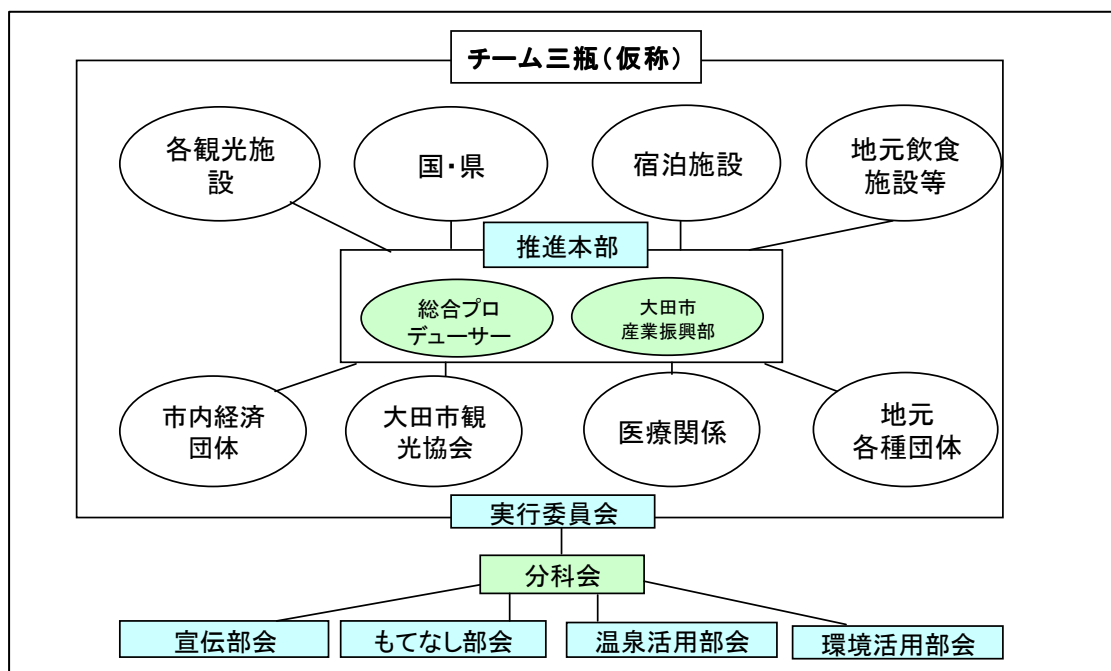
以上の具体 を実施するために、以下のとおり推進体制（チーム三瓶（ ））を組 す  
る。「チームさんべ」については、いわゆる施設長の 会ではなく、この計画に げたそ  
れ れの事業を実際に実 していく組 とする。

### ② 総合プロデューサーの設置

「チームさんべ」には推進本部を置くと共に、三瓶観光の問題点で整理したように、第  
三者的な観光・レジャーの 家として大田市観光総合プロデューサーを公募等により設  
置し大田市観光協会内に 置する。大田市観光総合プロデューサーは、各事業の進行管理  
と実行 員会の調整、各部会への指示等を行う強い と責任を持つ。そして市と に連  
を にし、ともに大田市観光の推進にあたる。

また、 員会には4つの部会を設置し、「チーム三瓶」の推進部 と位置づける。

チーム三瓶 イメージ図



## 9 豊富な地域資源の有効活用

大田市は、石見銀山、三瓶山、温泉津温泉以外にも、多くの観光資源に恵まれており、その活用は大田市全体の観光振興に欠かせない。また、東に40余り続く白砂の海岸は、自然に恵まれる美しい景観を有し、見る人の心を魅せる。

また、地域に根ざした伝統文化をはじめとする伝統芸能や、大田町に伝わるグロ、行事、そして、日本海の幸、山の幸といった食についても豊富にある。

仁摩町が生んだ本道策、温泉津町の市、手町のなど土が生んだ人達を挙げることもできる。

石見一として名高い物産社を代表とする社 閣も多数あり、これらの資源を、石見銀山遺跡、三瓶山、温泉津温泉等と有機的に結びつけることにより、新たな魅力の創出に繋げていく。

### 1) 海岸線を利用した取り組み

#### マリンスポーツ

根強い人気があるサーフィン、ウインドサーフィン等のマリンスポーツは、大田市海岸においても行われている。海水浴客がピーク状態の中で、マリンスポーツを利用した的な開を検討していく。

り

りで一のスポットといわれる宅野地区、湯地区など、大田市海岸にはり客が多数訪れる。漁免をもつ事業者もあり、今後的にPを開し、誘客にめる。

#### 海岸美化

りで全国的にも有名なについては、美しいの維持がの課題である。地元住民によるの活動が長年続けられているが、高齢化等により活動の続がぶまれている。このような状況の中、各種ボランティアや企業活動の一としての活動などいいな取り組みが行われている。このような動きが続き、市内全域へ広がる仕組みづくりが務である。



## 2) 地元産品を使った食の提供

大田市 土料理研究会の取り組みにより、市内産 を った「無名 当」がこのほど完成するなど、新たな 土料理への取り組みも始まっている。

現在、大田 会議所、銀の道 会等が中 となって新たな「食」について研究がなされており、あらたな名物料理の 生の可能性がある。

また、「三瓶そば」、「 」、「へか き」、「 」、「いり き」といった伝 料理の 伝も かせない。

観光における「食」は に大きな要 であり、新 な食材がすぐに手に入る大田市の を活かし、地産地消を に地域の産 を取り んだメニューの開発など新たな 開を図る。

## 3) 仁摩サンドミュージアムの活用

時間の流れ、人生観、 には 保全の大切さを主 している仁摩サンドミュージアム び一年計 時計は、 1世 の時代を えた今日、今こそ、将来のあるべき社会の や人の生き方を し、指し示しているものと えられる。加えて昨年、石見銀山遺跡が自然 との調 と産業との共生を って世界遺産に登録をされたところ であり、石見銀山に している仁摩サンドミュージアムは 、 が 、 の 等の海岸エリアと結合してゆくことの 効果は計り知れないものとする。

またサンドミュージアムの 徴である 時計を 台とした 画 をもとにドラマ化され高視 率を 得し、また 画化にもなり、世界遺産登録の い とシンクロすることによってこれらの地域資源が有するポテンシャルが高まり全国的にも 目されている。

また、 の 場については、単に観光バスの待 所のみではなく、将来的には に優しい 手 の導入を図る等によって石見銀山とサンドミュージアム びその が 一体となった情報発 と観光客の受入対策を強力に進めるものとする。

こうした取り組みを図り、石見銀山を訪 る観光客がサンドミュージアム へ、またサンドミュージアム を訪 る観光客が石見銀山へ、 いては温泉津、三瓶山、 根、大田市街を する観光の源として 動し、やがては滞在型観光を誘発することに結びつける手 とする。

このような状 のなかで、仁摩サンドミュージアムについては、一連の「 時計」ブームの で入場者数は増加しているが、平成3年の開館から17年が経過し、施設の 化が目立っている。今後の入 みを確保するためにも、施設のリニューアルが必要であり、

特に 機 の 新は 務である。

#### 4) 温泉津地区の活用

温泉津地区については、世界遺産のエリアも多く に魅力のある地域である。温泉津海岸については、石見銀山の 出港としての 割を果たしてきたが、木材や 材、 の み出しによって 治時代まで活 を してきた。

このような歴史を育んできた温泉津地区には、 白 を有する願楽 、優美な文 の を 宝とする高野 など 社 閣も多い。

温泉津 は 戸時代から、 、水がめ、づ などの 物を生産し全国に出 しその名をはせた。現在でも、数軒の 元が温泉津 の伝 を守っている。やきもの の は、 くから伝わる温泉津 の創 体験ができ、国内でも最大 の登り を って開催される、 と のやきもの りは である。

やきもの の や前 の仁摩サンドミュージアムは、全国的にみても特色のある 材を題材にした施設であり、それ れの施設の特色を最大 利用するためにも、世界遺産ゾーンとの連携は言うまでもなく、その他の市内の観光施設の連携が必要であり、 いては市内型観光に繋がる。

三瓶自然館、三瓶小 林、石見銀山世界遺産センター等の各施設間での共通イベントの開催や、合同でのP 活動など市内の各施設が一体となった戦略を っていく必要がある。

#### 5) 伝統芸能・文化の活用

石見 楽は、石見地方に伝わる 特の 楽であり、大田市にも多くの 楽団と土 、宅野には子供 楽もあり、一 の観光資源として位置づけられるが、大田市内に観光で訪れても 単に石見 楽を見る が整っていない。

また、田 えばやし、花田 え、ズク デ、石見銀山 など大田市の優れた文化を観光資源としてあらためて位置づける必要がある。

今後は、大田市 楽連 協議会や市内の 社、地元団体などとも連 を にし、 楽の上 情報や、それ れの活動状 の に め、情報発 をしていく仕組みをつくる。

## 10 おもてなしの観点からの観光振興

### (1) 市民挙げてのおもてなしへ

全国から石見銀山を目指して訪れる観光客や、今後増加が見られる外国人観光客に対して、「市民一人ひとりが観光大使」の気持ちを持っておこなう。このことは、行政だけではなく、市内の経済団体、自治会など各種団体や市内企業など全市的に市民に呼びかけ、「おもてなしのおおだ」を創り上げていく。

### (2) 観光関連産業のおもてなしの向上

市民はもとより、最前線でのおもてなしが、リピーターを獲得するための重要な要である。おもてなしをやさず、親切で丁寧な接客を基本に、「おもてなし 日本一」をキーワードにして実践していく必要がある。

### (3) 環境美化によるおもてなし

すでに取り組んでいる地域もあるが、道端での花いっぱい運動をはじめ、地域で行われている環境美化運動について理解を求めていく必要がある。「きれいなまのおおだ」を全市的な取り組みとしていきたい。

### (4) おもてなしの観点からの行政運営

産業振興を本市発の中心にしている大田市にとって、観光産業という分野の広い産業を振興していくことは非常に重要である。市域全体で、おもてなしの観点からの行政運営が大事となる。環境美化、サービスの検討、情報化等、市民だけにとどまらず、多く訪れる観光客の目にした施策の開きも必要になってくる。

## 11 資料編

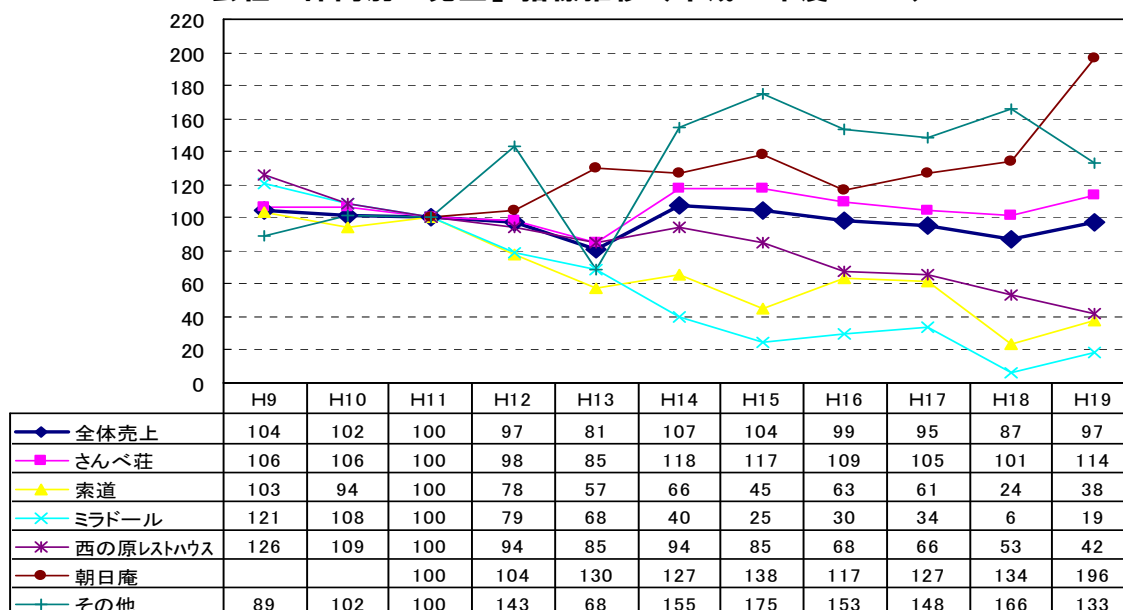
### (1) 財団法人大田市保養施設管理公社の現況と方向性

ここでは、過去の事業報告や決算書を基に、財務・組織・施設・事業面からの現状と今後の方向性を示す。なお、基本的な基本データは決算書並びに提出資料に準じるので本報告書では二次的な分析データのみの記載とする。

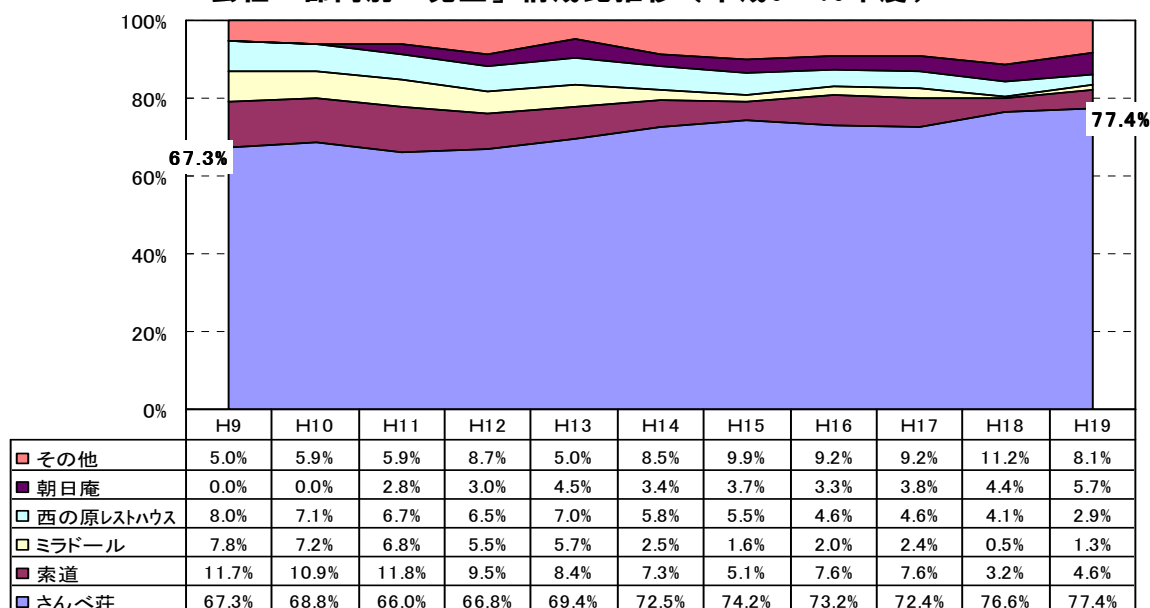
#### ① 過去10年間の公社経営全体の主な財務指標の分析

まず売上高は、直近の平成19年度（平成20年3月期）では約4億8,945万円・対前年11.2%増で6年ぶりの増となった。これは、石見銀山遺跡の世界遺産登録により、特に「さんべ荘」と「ミラドール」の集客力が上がったことが主な要因と見られている。ただし下図が示すとおり、平成11年度=100とした指数で見ると、全体売上は未だに97までしか回復しておらず、経営全体としては減収に止めがかかった状態と言える。

公社 部門別「売上」指標推移（平成11年度=100）



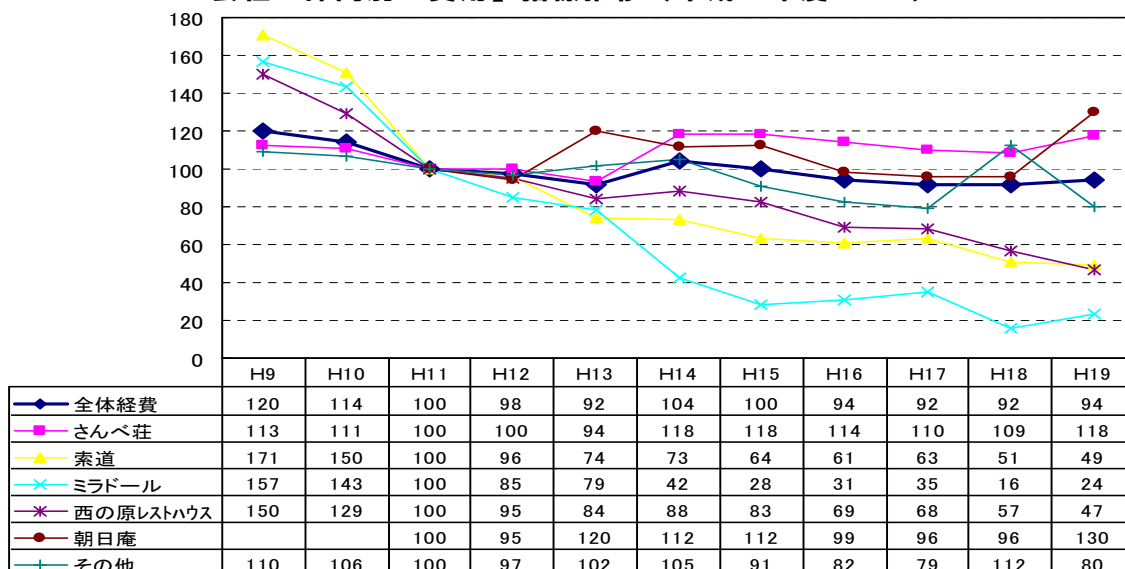
公社 部門別「売上」構成比推移（平成9～19年度）



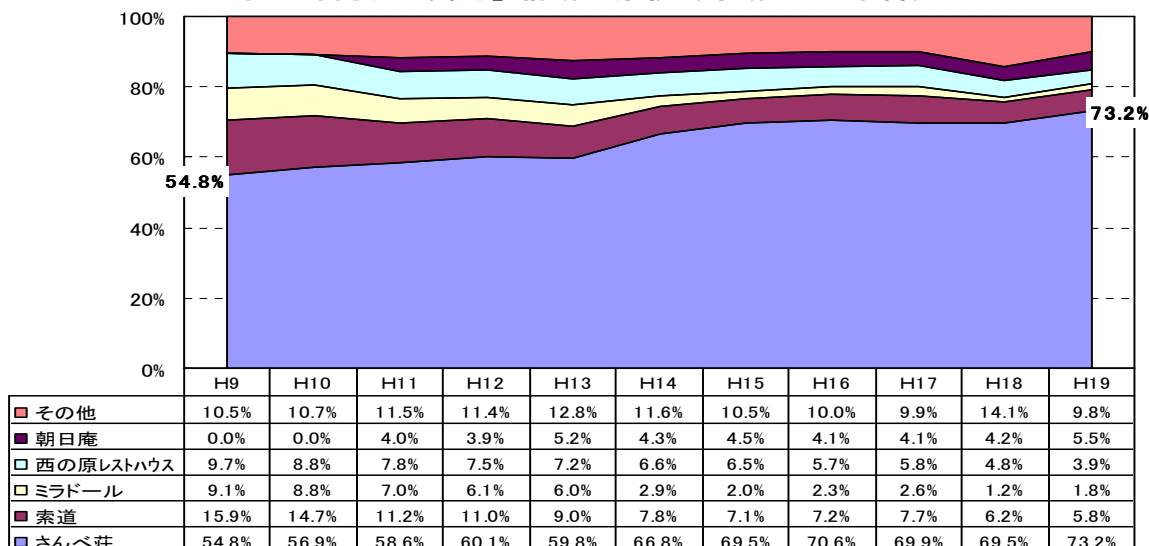
また公社全体上に占める「さんべ荘」の割合は、平成9年度の67.3%から平成19年度は77.4%まで高まっている一方で、以前は20%を占めたスキー関連部の「道」と「ミラドール」が約5%まで減ってきており、さらに「西の原レストハウス」の減少分を「朝日庵」がカバーして、ついには上規模も逆した形となっているなど、部門別の不調のりが一層増している現状と言える。つまり、過去10年間の売上構成の変化は、主に売上減少施設分を「さんべ荘」と「朝日庵」並びに「その他（事業外入等）」で補ってきたことが明らかである。

次に、費用（経費）と利益に関しては、直近の平成19年度の費用総額は約4億7,069万円で対前年2.7%増に抑えており、結果的には業利（減価前）も約1,876万円を計上し、2年ぶりの業となった。部門別では「さんべ荘」がプロフィットセンター（利益部門）であり、「朝日庵」が増により、全体からやっと業ベースに貢献できた度である。逆に「道」「ミラドール」「西の原レストハウス」は費用減も界に達しており、新たな売上増加策を講じない限り、経費カットだけでは対外出来ない状態にきている。

公社 部門別「費用」指標推移（平成11年度＝100）



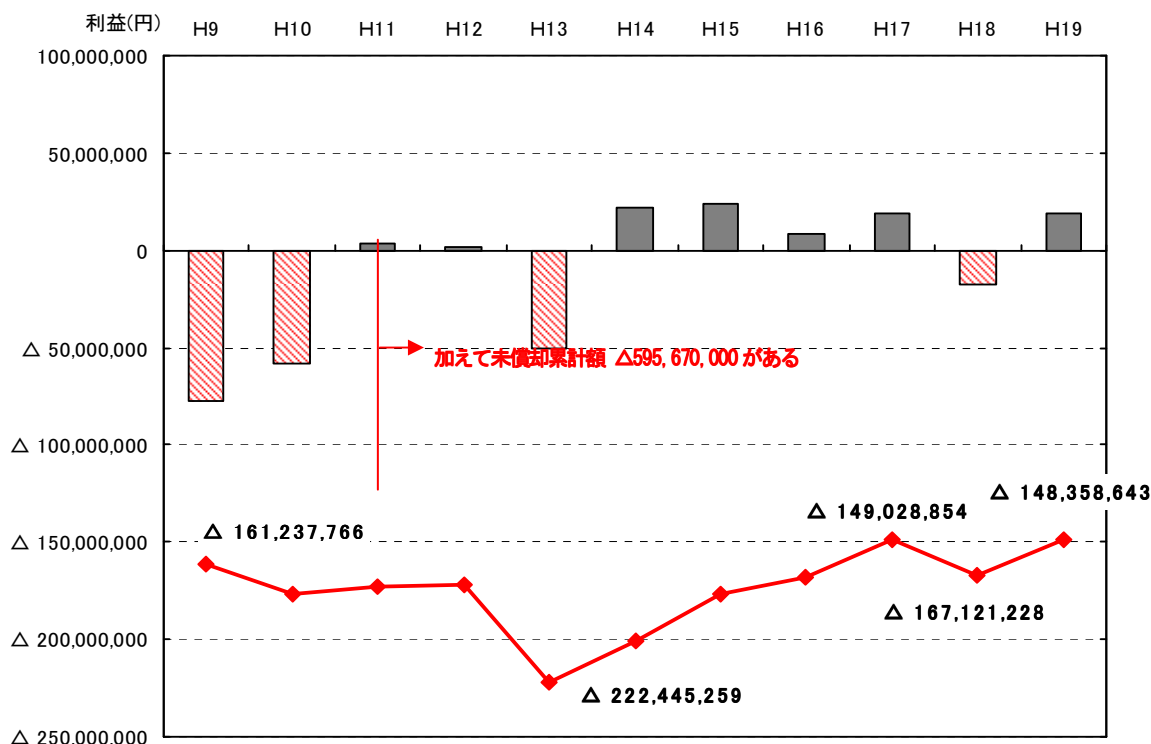
公社 部門別「費用」構成比推移（平成9～19年度）



計 では、下図が示すとおり平成13年度に約2億2,245万円（業利ベース）まで膨らんだ（見かけ上の）が、平成19年度には約1億4,836万円までされてはいるが、平成11年度以降の未計額は5億9,467万円なので、本来のは19年度で約7億4,403万円となる。一方、借入高は12億1,017万円（うち7,570万円は大田市付分をくと11億3,447万円）であり、土地や物・設備等の定資産と資（期資り）に充当されている。なお、平成20年3月の物び土地の不動産定価額合計は6億7,893万円であることから、本来ならば含み（時価価、諸等考せず）が2億円度ある計となる。さらに流動性に関して

は、手 現 が2,000 万円不足であり、資 りの が 化している (数値は 全て平成 20 年 3 月 現在)。

公社 単年度利益と累計利益推移 (平成9～19年度)



なお、今回の経 分 にあたり、大きな 資を企てた平成7年度(約3億8,257万円)、同11年度(約5,905万円)、同14年度(約2億1,861万円)の合計約6億6,000万円(う 借入 6億3,850万円・借入依存率約97%)に関する当時の事業計画書の提示を求め たが、「保存されていない(成されていない)」という状 であった。これは、その 理 のいかんによらず、 3年おきに責任者不在の経 分 が下されてきたとしか解 のしようがなく、平成9年度以降の経 分 悪化をもたらした最大の 原因は、景 況 悪化でもなく、 候補不 況でもなく、少子高齢化でもなく、施設の 老朽化でもなく、「経 分 」その ものであったと言わざるを得ない。この点に関しては、平成12年度に実施された経 分 改 善計画資料からも み取れるので、以下にその要点をまとめる。

② 公社の経営姿勢の問題点 (平成13年3月の経営改善計画後の取り組み方)

平成8～11年度の実数値を基に経 分 が実施され、平成12年度 に経 分 改 善計画報 書(以下、改 善報 書という)が提出されている。 内 は同報 書に準じるが、 いくつか重要な指 針・指導を受けながら、その後経 分 として取り組みきれていない点に

ついて、以下にその要点を整理する。なおこの時期の前提となる認識として、平成6年度に が解消され、 経 による 資 も であり、平成7年度の第2リフト増設やナイター化への 資 をしているが、平成5～8年 のスキー場の賑わいから一 して、平成9年の “ ショック (シーズン23日 業)” の を受けたのである。

改 報 書によると、平成8年度の 上高は約5億8,499万円であったが、平成11年度は4億7,510万円で、対3年前 で約1億990万円の減 を示していた。この間に ショックがあったのである。また 上減少に い同期間の費用も約1億6,557万円減少させているが、主に人件費カットを中 とした「小 」経 を 行したが、結果として 回復には く、平成8～10年度の3年間の当期利 (減価 後) で約1億7,320万円の を計上しており、平成11年度から減価 が未実施となっている。資 り はこの から 化したのである。

これらの経 悪化を生み出した要 を公社の経 体 にあるとして、改 報 書は次のように指 している。なお、理事会構成メンバーは当時の決 報 書を参 。

「実 的に公社に経 タッチしている理事は不在の状 である」  
「経 状 が悪化した平成9年度から3年間、抜本的な対策が じることができなかった」  
「現在の名 的な理事ではなく、外部から責任を持って経 に当たることに出来る人材を理事に える～(中略)～理事会そのもののあり方を変える必要がある」 (報 書P.16より引用)

には組 強化として、基本財産の増額や、経 計画の策定、人事 価制度の導入などに加え、財団法人から第三セクターへの切り え検討等も提示されている。また、公社事業の整理が既に言 され、 性の改 が見 める 続部 として「さんべ荘」「レスト ウス の 」「日 」の 部 が挙げられている。 らくこの報 を受けて、平成14年度の「さんべ荘」の本館改築と別館新築への 資を進めたと考えられるが、逆に の確保が な部 として「道」「ミラドール」「さんべ山の家」「温泉(源泉)」の4部 に対しての具体的な方策は どが りされ、廃止できたのは「さんべ山の家」のみである。

も ん、スキー関連事業はその公共性の観点や、民間活用の受け皿 手の問題、そして負 理(スキー関連部 のみで当時として約3億4,530万円)などの諸事情が 決定の 要 であったことは推測できるが、結局はその り が現 を生み出したのである。当時の指導内 は、振り ると、レスト ウス の を いては7年経過した現状認識とさほど変わらず、つまり 当な改 計画であったにも関わらず、その多くを実 に移せなかった経 責任は重い。 部 のさんべ荘が全体の 支えしなが



らも、不 部 まではカバーしきれず、 期の資 りに われ、 小 による  
前 業利 を にするのがやっとの経 であつた。

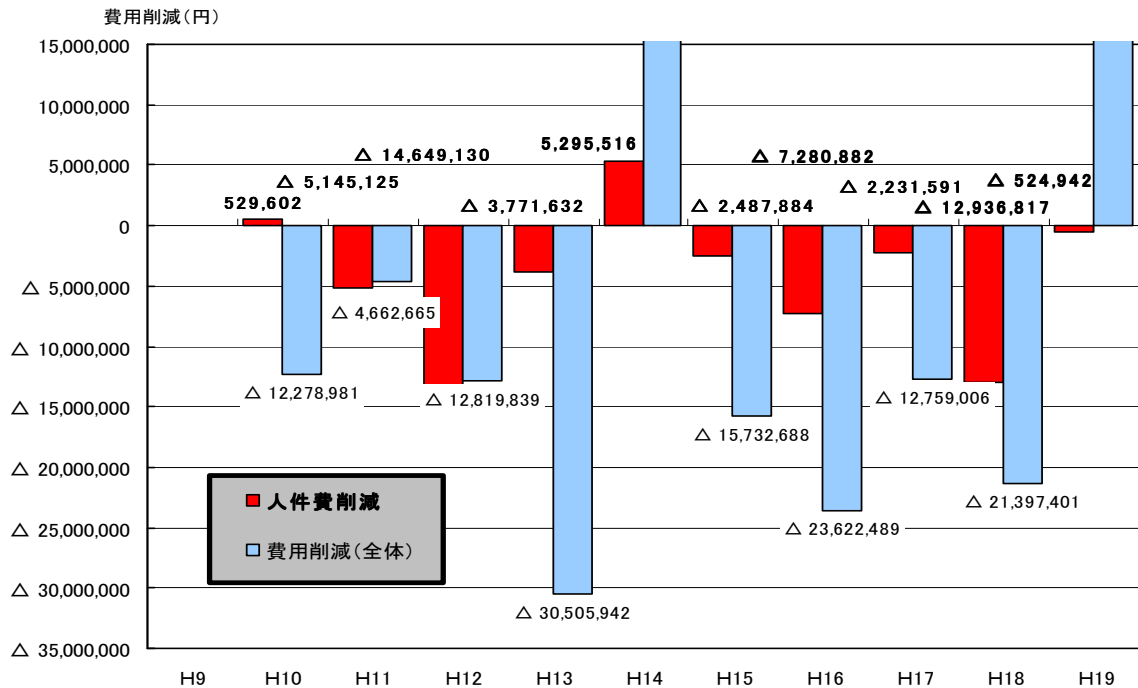
### ③ 公社経営の組織面での問題点

下表は、平成9～19年度の部 別人員と総人件費の推移を示している。これによると、平成9年に べ総人員数は4人減に まるが、正規社員 率を77%から51%まで め、逆に ・臨時・パートの 率を高めて、総人件費を 4,320万円 度カットしてきたことが分かる。対 上 人件費も43.9%から39.3%まで改 してきており、今後も正社員 率を抑えることで一定の総人件費抑制は続けられるが、総合的に見た場合は、 合業 で、 施設(5 所に分 )を考 すると、総人員 減による費用 減効果の界値が近づいてきていると される。

■ 公社 部門別人員構成の推移 (H9, H14, H19) ■

部	9	14	19	備考
事務局	5人	3人		19～：さんべ荘に
さんべ荘	34人	40人	44人	～14：山の家 務
の レスト ウス	6人	5人		18～：さんべ荘に
日		3人	5人	11～17： の 一部 務 18～：事務局 務 19～：単
道 ミラドール	11人	5人	4人	17～：北の 別荘 務
温泉管理所	1人			12～： 道 務
<b>計</b>	<b>57人</b>	<b>56人</b>	<b>53人</b>	
正規 員	44人	34人	27人	正規 率：77% 51%
・臨時・パート	13人	22人	26人	
総人件費(千円)	219,245	201,504	176,042	平 年 ( 19) 正 規：412万円 正 規：249万円
対 上	43.9%	40.2%	39.3%	総人件費 事業 入

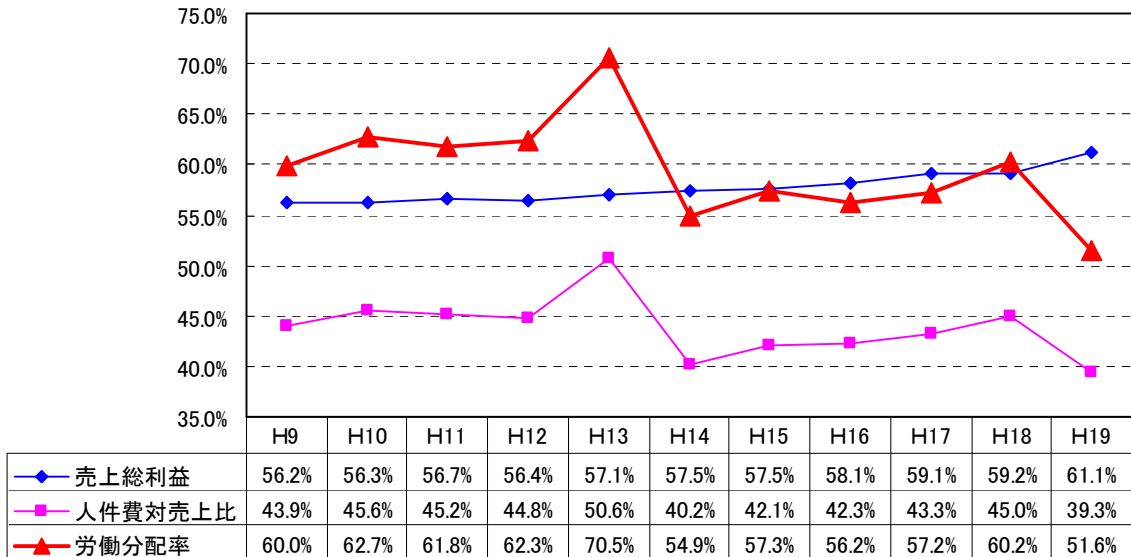
### 公社 人件費削減効果の推移（平成9～19年）



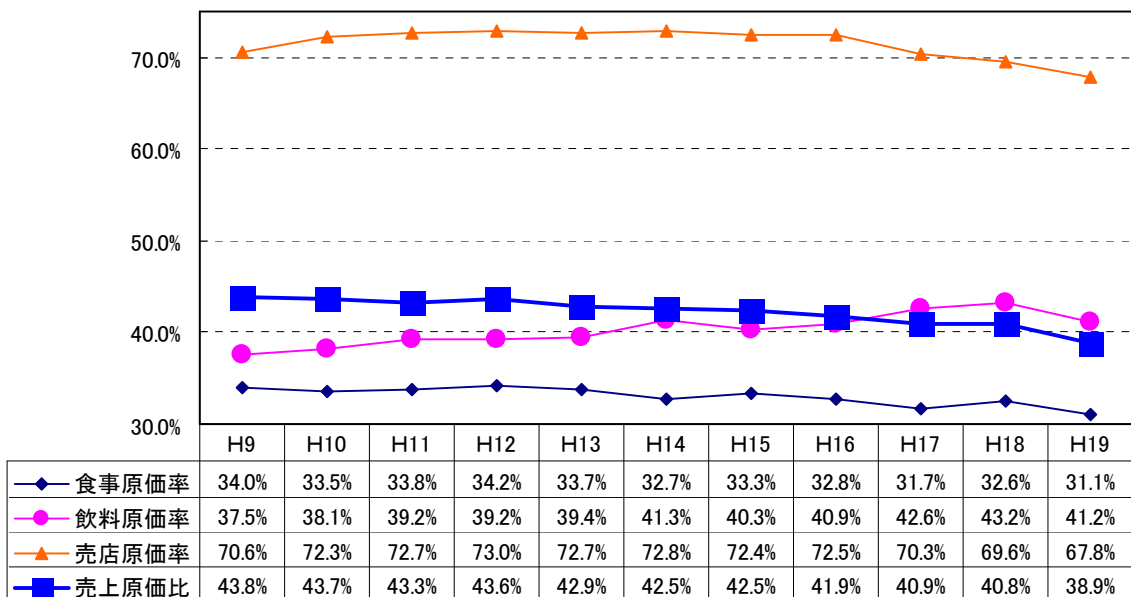
上記グラフが表すとおり、これまでも費用削減全体（減価）分を（く）に占める人件費削減効果は決して高くない。費用削減全体に占める人件費削減率を「寄度」とするならば、平成11、12年度は寄度100%超、平成18年度も寄度60%以上であるが、それ以外の年度はせいぜい10～30%程度である。また下の別のグラフを見ると、10年間で上総利（利）が4.9%改して61.1%に達しており性が向上しているらで、それによ分率も57～59%の推移から昨年度は51.6%を示している。分率はホテル業では40～45%、食・レストランでは55～60%が目なので正に近づきつつある。

これらの各種指標からも、一定以上のサービス水準を保つための人員数と人材力の維持と、全体費用を減するバランスにおいては応の改がなされたと価される一方、今後は単なる組小だけではない、一人当たりの上高・生産性といった別の指標向上のための方策が求められるにきているとされる。

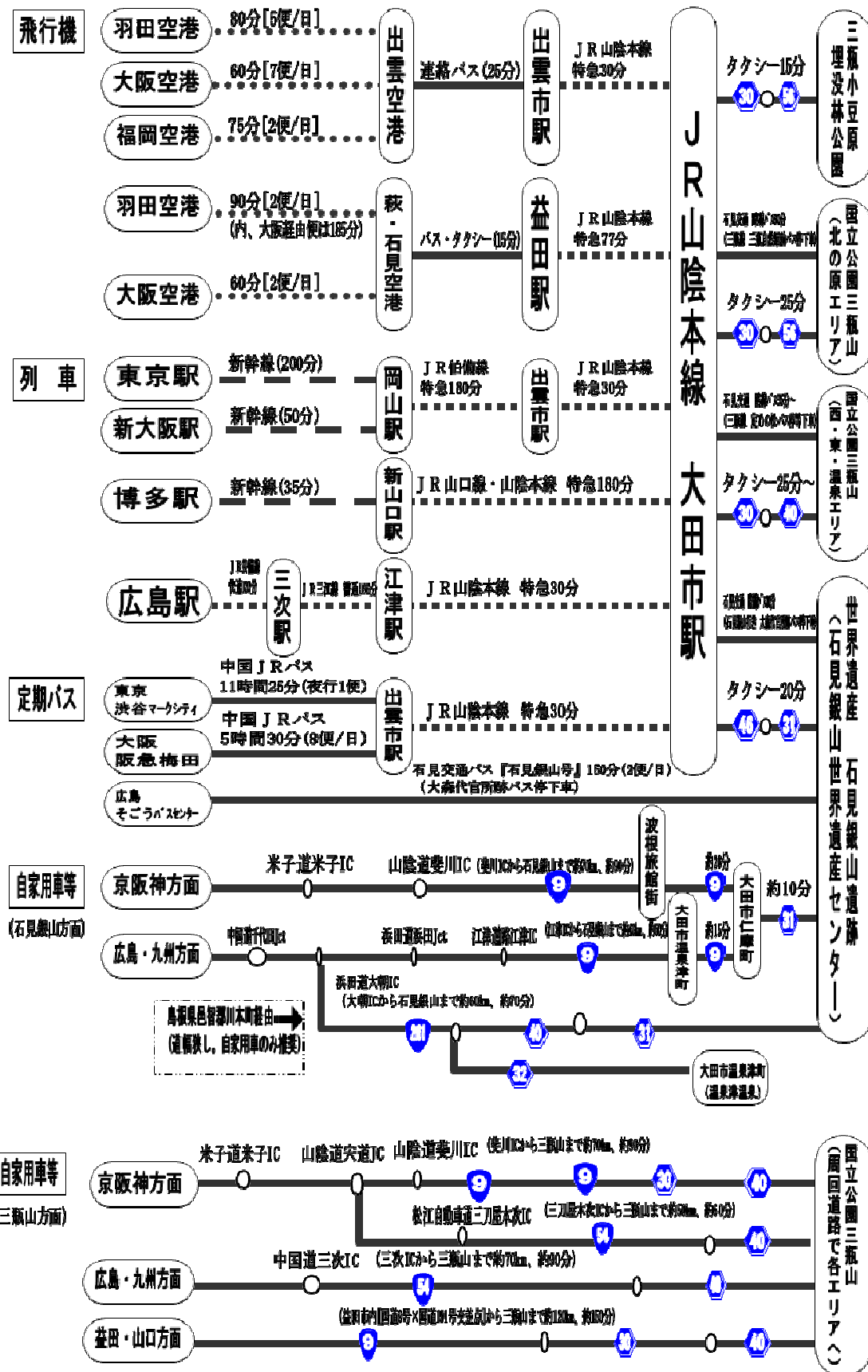
公社 売上総利益率と労働分配率の関係推移（平成9～19年度）



公社 売上原価率の推移（平成9～19年度）



(2) 大田市への交通機関別アクセス経路



### (3) 石見銀山を起点とした市内へのアクセスルート

#### ① 石見銀山→三瓶山

1) の ・東の ・三瓶温泉

推 ルート

県道 1 県道4 国道 7 県道 県道

の 東の 温泉街

サブルート

) 県道 1 →川合農道→県道 →県道 → の →東の  
→温泉街

) 県道 1 →福 農道→国道 7 →大 農道→県道  
→ の →東の →温泉街

2) 三瓶 ム・ 林公園・北の

推 ルート

県道 1 県道4 国道 7 県道 県道

三瓶 ム 林公園 北の

サブルート

県道 1 →県道4 →川合農道→県道 →県道 →

県道 →三瓶 ム→ 林公園→北の

県道 1 →福 農道→国道 7 →県道 →県道 →

県道 →三瓶 ム→ 林公園→北の

#### ② 石見銀山→波根温泉街

推 ルート

県道 1 県道4 国道 7 国道9 (ロード銀山)

県道 根旅館街

#### ③ 石見銀山→温泉津温泉・仁摩方面

推 ルート

県道 1 →国道9

## (4) 大田市周遊モデルコース

### ① 世界遺産を巡る

- ・石見銀山（大森地区）内のルート設定
    - ・町並みから 源 間 までのコース
    - ・大 保間 公開コース 世界遺産センター → 大 保間 → 間 →世界遺産センター
    - ・大 保間 公開、 の山 の整備によるあらたなコースの設定
  - 1) 本 上り コース 銀山公園→ 生 →大 保間 → 間 →本間 →石銀→ 山 望所→銀山公園 (120 分)
  - 2) 本 下り コース 1)の逆コース (60 分)
  - 3) 山 さん 上り コース 銀山公園→ 山 社→石銀→ 山 望所→銀山公園 (120 分)
  - 4) 山 さん 下り コース 3)の逆コース (120 分)
  - 5) 山 望所コース 石見銀山世界遺産センター→ 道→ 山 望所 →石銀→2) 4)へ移行 (120 分)
- 
- ・大森地内→石見 → ケ →温泉津温泉街→ 泊
  - ・石見銀山街道コース ( ケ 道、温泉津 泊道)

### ② 古（いにしえ）にふれる旅

- ・石見銀山→ 林公園→三瓶自然館

### ③ 自然満喫体験コース

- ・ の ( き ) →北の (サイクリング) →北の (ブナの自然林)
- ・キャンプ
  - 各所 → 北の キャンプ場
- ・三瓶山 巨木 り (本 社の大 、 の 定め の など)
- ・三瓶 広域サイクリング ツーリング
- ・スキー・ス ーボード・ くスキー

- り  
海（大田市海岸各所でり）  
わかさぎり
- り登山分  
東の観光リフト→大平山→室の内
- 三瓶登山コース  
の（定め）→三瓶→北の（）→の（定め）  
B 東の（観光リフト利用可能）→大平山→三瓶→三瓶→北の→東の  
→室の内 → → の  
→三瓶→国民宿 前  
C 北の →三瓶→三瓶→東の →北の  
三瓶、三瓶、子三瓶、三瓶の全山 可能。

#### ④ 三瓶3つの池巡り

→ →東の観光リフト→室内 →大平山（望所）→東の観光リフト  
、条件がよければ大平山望所からは海が見渡せる。

#### ⑤ 大田そば三昧

石見銀山 前そば 日 おおもり会館  
三瓶山 さめ野 さんべ荘 きつ川食 木の香 羅はないかだ  
大田町 平 ロード銀山

#### ⑥ 温泉三昧

（三瓶山）中 施設は、三瓶温泉街の三瓶ヘルスセンター（ ）

（三瓶山）

小 温泉→さめ野→さんべ荘（変り種の湯）→湯元旅館→の湯→の湯  
（仁摩・温泉津）

湯 温泉→温泉津温泉（湯・元湯）

## ⑦ 体験三昧

- ・ しポート
- ・ 木 体験 三瓶木 館
- ・ ガラス 体験 仁摩 れあい交流館
- ・ 体験 温泉津やきものの
- ・ マリンスポーツ 根海岸、福光海岸

## ⑧ 風物詩

- ・ 三瓶 の 入れ ( 月下 )
- ・ ズク デ ( の 期 ) 田 え ・ り の 会

## ⑨ おみやげ (大田市東側から)

- ・ ロード銀山 ( 手町 )
- ・ 式会社 田 味 ( 町 )
- ・ いずもや ( 仁摩町 )
- ・ 温泉津 れあい館 ( 温泉津町 )
- ・ おおだブランド 市内各業者

## ⑩ 神楽三昧

- ・ 各 社 の り の 日 を し、「本物の 楽を本物の場所」でというコンセプトで、各地域で開催される 楽の上 情報を提供する。
- ・ 設会場の設置についても検討していく必要がある。

## ⑪ 寺社仏閣巡り

- ・ 社  
山 社 → 豊 社 → 戸 社 → 東 ( 源 ) → 上 社 → 石見一 ( 物  
部 社 ) → 大田南の → 大田 → 大田 多の → 宅野 →  
島 社 ( ) 前 社 → 社 → 島 社 → 社
- ・ お  
大田 南お り  
光 → 大願 → → → 正 → 見 → 楽 → 総光 →



大森町お　り（「銀山　」　り）

源 → 性 → 観世 → → 泉 → 羅 → 本 → 楽 → 養  
→ 水 ……

仁摩エリアお　り

→ → 向 → 泉 → 法 → 往 → 福 → 行 →  
行（　）

温泉津エリアお　り

→ 楽 → → → 楽 → 水大 → 泉 → 願楽（  
白） → → 高野 → 願林

## ⑫ 鍍絵巡り

社 閣　りと重　する場所もあるが、その他長福（　根町）など

## ⑬ 郷土・名物料理

ロード銀山

へかやき　　根旅館街

無名　　、さんべ荘

海の幸　　温泉津旅館街

ホロホロ　　さんべ荘

ジンギスカン　　きつ川食

## (5) 観光計画研究会名簿

各種団体名		名
大田市観光協会	企画員	
大田 会議所	次長	小
J 石見銀山	企画推進課長	東 輝
大田市旅館組合	子旅館	子
J R大田市	長	水 年
石見交通	所長	々木
島根大田 年会議所	直前理事長	森山 仁
	理事長	田
仁摩サンドミュージアム	事務局長	政
温泉津温泉協会	輝 荘支 人	公一
三瓶自然館	総務課 課長代理	石田 二
大田市料 組合	会長	石川
大田市森林組合	業務課長	林 達
三瓶温泉協会	会長	川
三瓶ま づくり 員会	会長	

(敬称略)

## (6) 委員会開催状況

- 第1回 平成19年11月16日 ( )
- 第2回 平成20年 1月11日 ( )
- 第3回 1月21日 (月)
- 第4回 2月6日 (水)
- 第5回 2月21日 (木)
- 第6回 3月11日 ( )